

体験寄稿

1 国関係者	188
2 市町長	193
3 消防関係者	200
4 警察関係者	202
5 防災等関係者	203
6 医療関係者	209
7 ボランティア関係者	214
8 被災地の声	219

1 国関係者

(1) 陸上自衛隊金沢駐屯地司令兼第14普通科連隊長	正木 幸夫 ……	188
(2) 航空自衛隊第23警戒群司令兼輪島分屯基地司令	佐藤 雅俊 ……	189
(3) 北陸地方整備局金沢河川国道事務所長	蓮見 有敏 ……	190
(4) 林野庁森林整備部整備課課長補佐	堂本 整 ……	191
(5) 石川労働局長	坂本 潔 ……	192

2 市町長

(1) 七尾市長	武元 文平 ……	193
(2) 輪島市長	梶 文秋 ……	194
(3) 珠洲市長	泉谷満寿裕 ……	195
(4) 志賀町長	細川 義雄 ……	196
(5) 中能登町長	杉本 栄蔵 ……	197
(6) 穴水町長	石川 宣雄 ……	198
(7) 能登町長	持木 一茂 ……	199

3 消防関係者

(1) 奥能登広域圏事務組合消防本部輪島消防署	国永 剛 ……	200
(2) 輪島市消防団諸岡分団長	四柳 末吉 ……	201

4 警察関係者

石川県警察本部警備部機動隊小隊長	松村 圭 ……	202
------------------	---------	-----

5 防災等関係者

(1) 北陸電力株式会社七尾支社長	竹原 利一 ……	203
(2) 西日本電信電話株式会社金沢支店設備部災害対策室長	榊 敏明 ……	204
(3) 財団法人石川県建築住宅総合センター理事長	照田 繁隆 ……	205
(4) 社団法人石川県建築士会輪島支部長	高出 正次 ……	206
(5) 独立行政法人土木研究所土砂管理研究グループ 地すべりチーム上席研究員	藤沢 和範 ……	207
(6) 独立行政法人森林総合研究所 水土保全研究領域治山研究室長	落合 博貴 ……	208

6 医療関係者

(1) 元能登北部医師会長	山岸 満	……	209
(2) 公立能登総合病院 事業管理者	川口 光平	……	210
(3) 輪島市立輪島病院 病院長	品川 誠	……	211
(4) 金沢赤十字病院整形外科医	堀本 孝士	……	212
(5) 珠洲市総合病院看護科看護師長	天満 富子	……	213

7 ボランティア関係者

(1) 穴水町ボランティア連絡協議会長	松田栄四郎	……	214
(2) 日本赤十字社石川県支部防災ボランティアリーダー	北村 裕一	……	215
(3) 石川県災害ボランティアコーディネーター協会事務局長	松井 喜憲	……	216
(4) 災害ボランティアコーディネーター	伊藤 静香	……	217
(5) 石川県立羽咋高等学校2年	山田 亮	……	218

8 被災地の声

(1) 輪島市門前町道下区長	泉 靖郎	……	219
(2) 農事組合法人モロオカエーシー代表理事	竹内 新一	……	220
(3) 志賀町笹波区長	茶畑 勝朗	……	221
(4) 輪島工房長屋	七浦 禎蓮	……	222
(5) 七尾市中島町	永谷 誠行	……	223
(6) 輪島市門前町深見区長	板谷 弘	……	224
(7) 志賀町鶴野屋	松田外茂三	……	225
(8) 穴水町大町	皆森 照子	……	226
(9) 七尾市立小丸山小学校4年	南 優花	……	227
(10) 輪島市立門前中学校2年	松原 萌	……	228
(11) 和倉温泉旅館協同組合女将の会 会長(大観荘)	大井マ璃幸	……	229
(12) 輪島漆器商工業協同組合理事長	岡垣 昌典	……	230
(13) 合名会社中島酒造店代表	中島 浩司	……	231
(14) 総持寺通り商店街復興委員会会長	五十嵐義憲	……	232

注) 役職については、平成19年3月25日当時の役職で記載
注) 内容については、平成20年秋頃に寄稿いただいた内容

異動直後の能登半島地震

陸上自衛隊金沢駐屯地司令兼第14普通科連隊長 正木幸夫

能登半島地震の発生を知ったのは、横浜の自宅で早朝から単身赴任のための荷造りをしている最中であった。テレビのニュース速報は、能登半島で非常に大きな地震が発生し、かなりの被害が出ている模様であると伝えていた。春の定期異動により、3月28日付で金沢への異動が決まっていた私は、「これは、大変なことが起こった。移動のための航空券を少しでも早めのものに変えなければ！」と直ちに手続きをした。連隊長が行う現地部隊に対する指揮活動に空白をつくるわけにはいかないとの思いからであった。異動完了日前日の27日夜、それまで災害派遣の指揮を執り、同日付けで東京へ異動する前任者の山之上連隊長とすれ違うように小松空港に到着し、待機していた部隊車両に飛び乗り、北陸3県を一手に担任する第14普通科連隊が所在する金沢駐屯地へ直行した。

駐屯地到着後、真っ直ぐ指揮所に入ると、副連隊長、幕僚をはじめとした第14普通科連隊の本部要員が慌しく働いていた。彼らは、地震が発生した25日9時42分から僅か8分後の9時50分には既に第14普通科連隊指揮所を立ち上げ、情報収集、部隊運用に係る諸準備を精力的に行っていた。他方、地震発生直後の非常呼集で召集された中隊長以下の部隊隊員は、同日11時8分の石川県知事からの災害派遣要請に基づき被災現場へ急行した以降、昼夜を分かたぬ救援活動を実施中であった。連隊指揮所では私の到着を待ちかねたかのように、現地の被災状況、現地部隊の活動状況、今後の活動予定等に関する詳細な報告が所掌科長によって行われた。一連の報告を受けた後、「被災現場へは最早いつ行けるのか。」と問うと、即座に「朝一番に行ける準備は整っています。」との答えが返っ

てきた。東京羽田を後にしてからの半日間、慌ただしかった時が過ぎ、明日からの自ら為すべき任務をあれこれ考えながら、暫しの仮眠についた。

明けて翌日、被災現場に到着したときの印象は「痛々しい」の一言に尽きた。美しい町並みを彩っていた濡れ瓦を敷き詰めた大きな屋根は、ある所ではねじ曲げられ、またある所では引きちぎられるように倒壊していた。緑の田畑を縫うようになだらかに走るアスファルトの農道は所々地割れで引き裂かれて段差ができていた。部隊で収集した情報により、不幸にしてなくなられた方が一人おられたことは到着前に承知していたが、建物等の被害はそれまでの情報にわかには信じられない程ひどいものであった。現地活動中の部隊を視察すると、そこには、荒れ果てた被災地で黙々と救援活動続ける隊員達の姿があった。彼らの主たる任務は給水、給食等、被災者の方々の生活・生命維持に係る活動である。作った食事は被災者の方々のためのものであり、当然、自ら食すわけにはいかない。部隊から携行した缶詰を食べながらの救援活動であった。また、自分の家族の家が被害にあう中、救援活動を続けた隊員もいた。その様な中、被災者の方々から頂いた野菜の皮むき等々の自発的な御支援は、他の被災者の方々のみならず隊員たちの大きな心の支えとなっていた。

災害派遣は自衛隊の本来任務である。金沢駐屯地はいつ何時災害が発生しても対応できる即応体制を維持している。しかし、真に実効的な救援活動は、地域の方々との連携プレーがあってこそ成り立つ。今回不幸にも発生した能登半島地震において実効的な救援活動が実施できたことはその証左となるものであった。

能登の人々と思いを一つに

航空自衛隊第23警戒群司令兼輪島分屯基地司令 佐藤雅俊

地震発生当日、私は、市ヶ谷の統合幕僚監部で陸・海・空の統合運用を担当する部署に配置されていました。地震の発生を知らせる一斉呼び出しを受けたのは、神奈川の海岸を散歩している途中で、輪島分屯基地司令の配置に関する発令を受けた矢先のことでしたので、大変なところに着任することになったというのが正直な思いでした。被災地でもある輪島分屯基地に着任して、私がまず行ったのは、災害対策本部長である輪島市長の表敬でした。部隊として最大限の努力を継続する旨を説明したところ、市長は深々と頭を下げ、今までの自衛隊の活動に謝辞を述べられました。私は、短い会話の中に、部隊と輪島市との信頼関係を実感することができました。本日は紙面を頂きましたので、今般の地震に際しての初動対応や部隊としての取り組みを紹介したいと思います。

一、輪島市との信頼醸成

災害派遣等で指揮関係の異なる複数の組織が活動する場合、重要な事は互いの組織を理解し尊重することであると考えています。ご存じのとおり、自衛隊の行動は各種制約の下で行われますので、部隊として実施できることとできない事があります。縦割りの思えますが実際の行動においてはその根拠を求められ過剰な行動はできません。市が実施すべきことと自衛隊が実施できることを互いに理解することは大変重要であります。今回、輪島市や部隊の災害派遣活動が比較的スムーズに実施できたのは、数年前に輪島市と合同で行った指揮所演習が役に立ったと伺っております。多種多様な状況に対して、どのように対応すべきか本音で議論する環境が必要です。指揮所演習はお互いを理解する上でも有意義であったと考えております。

二、情報の共有

地震発生直後に災害対策本部に連絡員を派遣し、24時間体制で情報の収集と各種

調整を実施させました。刻一刻と状況が変わる中で柔軟に事態に対応するためには、組織の垣根を取り払い、互いが保有する情報を共有して、不足する機能を補完しあうことが不可欠であると考えています。情報共有のためのツールやプロシジャーはまだまだ改善の余地がありますが、できる部分からはじめていきたいと考えています。

三、被災者の目線にたった活動

直接的な支援活動の実施に際しては、被災者の目線で活動するように隊員を指導し、状況判断を行う場合には常に現場の意見を聞くように心がけてきました。上級部隊も現場で活動する部隊の意見を最大限に尊重した結果、災害派遣に際し部隊行動が現場の状況から乖離することはなかったと感じています。

四、ボランティア精神の滋養

自衛隊が撤収フェーズに入り、他自治体等からのボランティア活動が行われるようになると、災害派遣活動している隊員のなかにもボランティア活動に参加したいと感じる隊員がでてきました。そこで、災害派遣中の部隊としては、初めて、ボランティア休暇を許可することとしました。休暇で抜けた隊員を全員でバックアップすることで20数人の隊員をボランティア活動に参加させることができましたが、この経験は指揮の高揚につながったと感じています。

震災から一年、私自身は無我夢中で駆け進んできた感じがいたします。災害や危機管理に際しては事前の準備や対応能力が問われることとなりますので、これからも日本海の重要なレーダーサイトとして、不断の警戒監視を実施するとともに、地域の方々と交流を含め、信頼され且つ行動する部隊として、さらなる練成を積み重ねて参りたいと思います。

地震からの復旧・復興とさらなる活性化を願う

北陸地方整備局金沢河川国道事務所長 蓮見有敏

地震直後、余震が続く中で金沢に着任し、翌日最初の仕事として衆議院災害対策特別委員会の先生方の現地視察に同行した。自分の目で見た被災地は、報道以上に家屋の倒壊・損傷が著しく、道路をはじめとする公共施設の被害は甚大であった。一方、避難所にはお年寄りを含め多くの方がおられたが、サポートする職員、ボランティアの方のご努力により不自由な生活の中でも皆さん落ち着いておられたのが印象的であった。

北陸地方整備局では、地震発生直後から県庁にリエゾンを派遣して情報収集に努めるとともに、輪島市役所横に災害対策本部車2台を派遣し災害対策現地支援センターを開設し10人体制で連絡調整等に当たった。金沢河川国道事務所の管理する直轄国道には、震源地に近い能越自動車道穴水道路を含め大きな被災はなかったことから、我々の地震対応の主体は県、市町の管理する道路等の復旧支援となった。

大きな災害時には自治体の職員は被災者のケアや避難所の対応に全力にならざるを得ず、道路等の公共施設の被害状況調査まではとても手がまわらない。輪島市道を中心に被災状況調査、復旧費申請のための報告書の作成等をのべ150人規模で行った。また、遠隔操作式バックホウ、衛星通信車、照明車等の災害対策機械を職員とともに現地に派遣し、応急復旧にあたった。能登半島地震におけるこのような災害発生直後からの人員・資機材の緊急的な派遣は、その重要性が認識され、平成20年度の国土交通省緊急災害対策派遣隊（通称TEC - FORCE）の発足に繋がる。蓄積された多くのノウハウが受け継がれ、緊急時の支援体制が構築されたと言える。

この原稿を書いている最中も、岩手・宮城内陸地震の対応でTEC - FORCEが派遣されている。改めて地震大国日本とその脆弱な国土を

思わざるを得ない。

特に被災の著しい能登有料道路や国道249号八世乃洞門、門前町深見の輪島市道については、長期間の通行止めを余儀なくされ、学識経験者、国土交通省や土木研究所の専門家の助言も得ながらの復旧になった。このような場合、早期復旧と安全性・利便性確保の両立が求められるが、往々にしてこれらが相反することが多い。復旧工法を決めるにあたっては難しい判断を迫られることが多かったと思うが、能登有料道路のGW前の通行止め解除、八世乃洞門の夏休み前の開通等、当初の被災状況からは想定できないほどの短期間での応急復旧がなされており、担当された方々、作業に当たられた方々のご努力には心から敬意を表する次第である。

観光産業が地域経済に与える影響が大きい能登半島では、観光ルートが長期の通行止めになると地域全体に大きなダメージを与えるし、風評被害も含めてその影響は広範囲かつ長期に及ぶ。県市をはじめ関係機関も風評被害の払拭に腐心され、我々も微力ながら道の駅やHP、道路情報板、自らの口コミで道路交通の復旧状況をPRしたが、残念ながら能登地域に限らず加賀や富山県でも観光入り込み客が減少したようで、結果として地震の影響は小さからず残ってしまった。

能登半島地震の復旧・復興は、今後住宅の再建、観光の振興、さらにはコミュニティーの再構築などのステップに移るが、地域がさらに活性化するように、県民の方々が従前より増して笑顔になるように、我々としても社会資本の整備に努力をしてまいる所存である。また、TEC - FORCEを派遣するような大災害は起こらないに越したことはないが、万が一の時に備え危機管理に万全を期してまいりたい。

早期復旧に向けた支援

林野庁森林整備部整備課課長補佐 堂本 整

2007年3月25日、自宅で見えていたテレビに地震速報のテロップが流れる。「石川県能登地方で震度6強の地震が発生」。阪神淡路大震災、新潟中越地震の被災状況が脳裏をよぎる。

『林道被害に関する情報収集を早急に!』

とは言え、林道は一般道に比べ山間地を通っているものがほとんど。余震が続き二次災害発生が危惧される中、早急に現地に入り調査することは可能なのか? 県から国へ応援要請があれば迅速に対応できるよう応援体制の検討も必要だ。

しかし、県、市町の担当者の皆さんの連日連夜にわたる大変な努力により、時間の経過とともに被害の状況が明らかになってくる。さらに、能登有料道路のサービスエリアで孤立していた観光バスの乗客等が、林道を使って救出されたニュースや、門前町で孤立していた地区が林道の早期復旧により孤立が解消されたニュース等を知り、つかの間の安堵感。

結果、被害発生10日後にはすべての林道の現地調査を終了し、この時点で林道被害は297カ所、被害額8億2,600万円に達したとの報告を受けた。

次は早期復旧に向けた災害査定を早急に計画することとなる。日程調整の結果、第1回(5月7日~11日)と第3回(6月4日~8日)の査定は私が現地入りすることとなった。午前11時、能登空港に着陸。奥能登農林総合事務所では林道の被害概要等打合せを行う。打合せでは、東京で想像していた以上の緊迫した雰囲気はひしひしと伝わる。

第1回の査定は、被災した林道の中でも優先順位の高い林道を中心に、15路線56カ所を正味3.5日で査定するハードなスケジュールである。

事務所から輪島市へ向かう道中、ブルーシートに覆われた民家の屋根、建設されたばかりの応急仮設住宅、倒壊した建物のもと思われる廃材の大きな山等、被害の甚大さと、復興に向けての地域住民の苦悩が伺える。

車で1時間ほど走って到着した林道の被災の

形状を見て驚いた。路体には高さ1m以上の段差と、数十cmの大きな口をあけた地割れ。コンクリートの重力式擁壁が数十cmも持ち上げられたもの。路体全体が崩落して跡形もなくなってしまっているものもある。想像を絶する地震の揺れによる悲惨な状況を目の当たりにし、改めて自然の力の大きさと地震の恐怖を感じる。

一方、見た目には林道の舗装に数mmから1cm程度のクラック(ひび割れ)が入っているだけの現場。被災の程度を確認するため、このクラックに直径数mm長さ2mのピンポールを差し込んでみる。ほとんど抵抗を感じることなく「ズボッ、ズボッ、ズボッ」とピンポール全体が地面の中に簡単に入ってしまう。一体、どの深さまで路体を構築し直せばよいのか判断に迷う。中途半端な復旧の方法では、降雨の際にこの場所が起点となって再び崩壊してしまうことも考えられる。

被災者である県、市町の皆さんのためにも、低コストで最大限の効果を発揮できる工法で復旧できるよう査定し、指導する必要がある。技術者としての腕の見せ所でもあるが、査定官立かせの現場でもある。

現地では、復旧工法の選定に苦慮する場面もあったが、担当者の迅速かつ適正な対応の結果、6月22日までに約6億9千万円の事業費を決定し、林道の災害査定を終了することができた。査定終了から約5カ月後、東京での会議で、奥能登農林総合事務所の林道担当者のOさんに偶然会った。現場の復旧状況はどう? の問いに「査定を受けたほとんどの箇所の工事発注を終了し、着々と工事進行中です」との答え。「全ての林道の復旧工事が完了するまでがんばれよ」と激励する。

被災現場では、今なお多くの人達が復興に向けて汗を流している。我々ができる支援は、全体からすると小さなことでしかない。一日も早い完全復興を切に願う。

能登半島地震体験記

石川労働局長 坂本 潔

日曜日の午前9時40分頃、大きな揺れとともにテレビの上の卓上カレンダーが落ちた。あわててテレビをつけるとまもなく地震速報が始まり、能登で震度6強という文字が飛び込んできた。

東京の自宅からメールが入る。県外から電話は通じないが、メールは送れるようだ。

労働局に災害対策本部を設置し、職員の安否等情報収集を行うが、休日のため一部職員の安否が不明のままであった。

翌日、早い段階で職員全員の安否の確認が出来たので、災害の状況把握と職員を激励するため、穴水、輪島、七尾の各監督署、職業安定所を回ることにする。途中、能登有料道路が柳田インターで通行止めのため一般道で行くこととなるが、支援のために来ているのだろうと思われる、多くの他県ナンバーの消防車両とすれ違う。ブルーのシートをかけた家も多く見え、ことの重大さを物語っていた。各監督署、職業安定所とも外壁、床の一部にひび割れが出来たり、庁舎の一部が隆起している部分もあったが、どうやら大きな問題はなさそうだ。余震が続いており、職員の不安も大きなものがあったが、各監督署、職業安定所とも前日に職員が出勤し、事務所内に倒壊している書棚、ロッカー等や散乱している書類を整理し、当日には勤務体制が整っていた。

翌々日「石川労働局における能登半島地震への対応措置について」として、労働局の企画室と全ての監督署、職業安定所に労働者、事業主

の方からの相談に応じるべく、特別労働相談窓口を設置するとともに、災害救助法適用による一時的な離職者に対する支援等について、報道発表を行った。

労働局としては今回の地震に際し、労働災害の早期補償と労働災害防止団体、発注機関等への、復旧工事における労働災害の防止要請を行うとともに、労働災害防止団体の協力のもと、輪島市の災害対策本部等に、復旧工事における粉じん暴露防止のために、防塵マスクを1,900個配布した。

また、災害により離職された方に対する雇用対策として、特別労働相談以外にも、雇用保険失業給付の受給者が、地震のため職業安定所に来所できない場合に、受給者からの申し出により、所定の失業認定日を変更することや、一時的に離職を余儀なくされた方に、雇用保険の基本手当を支給する特例措置を行うなどの対応につとめた。

地震後、直ちに労働局内各課室及び監督署、職業安定所に対して庁舎内外の備品、物品等について転倒、落下の危険性についての点検指示を行うとともに、後日行われた労働基準監督署長、公共職業安定所長合同会議では、災害発生時の対応等について周知徹底を図った。

今回の地震では、組織がうまく機能したが、忘れていたことも多く、日頃から繰り返し災害時の対応について周知していく必要性を、改めて痛感した。

能登半島地震における体験から

七尾市長 武元文平

春の一斉清掃を激励するため市内を巡回中、地震に遭った。慌てて市役所に向け、地震情報を確認した。庁舎内を見てみると、書類やファイルが散乱しており、電気も消え非常灯に変わっていた。テレビでは能登半島が震源で、震度6強と報道され、平成16年10月の中越大地震の惨状を思い起こし、市民の被害状況はどうか、市内のライフラインや家屋の状況はどうかというの、最初に頭によぎりました。

急いで出勤してきた職員で災害対策本部を設営させた。幸い防災訓練を行った後だったので職員が迅速に落ち着いて対応していた。

地震発生から15分で本部を設置し、総務・広報班、上下水道班、産業・農林班、衛生班、環境班、土木班が設置され、防災用電話も設置したが、市民に知られていなかったため、被害情報や問い合わせが代表電話に集中して混乱した。

災害発生から2時間後、第1回災害対策本部会議を開き、被害状況及び対応状況などの報告を受け、今後の対応を指示した。正確な情報の把握と職員間の情報共有が必要と考え、広報班への情報提供を徹底させた。

能登総合病院の水タンクが漏水しているというので金沢市へ給水車の派遣要請をした。病院の地震対策は想定外であったので、随分慌てました。人命に関わることなので本当に冷汗が流れる思いでしたが、幸いにも治療等に支障もなく、胸を撫で下ろしました。

3時間後、避難所を開設した。被害者が増えたので避難所を7カ所に増やし、職員を2人ずつ派遣し対応にあたらせたが、被災者の方々の不安な気持ちをどれだけ慰められたことか。

また、各地区の民生委員や町会長に老人世帯や一人暮らし高齢者などの安否確認をお願いしたが、皆さんはすでに安否確認を終えられて、一人ひとりの状況を正確に把握されておられたことに、本当にうれしく頭が下がりました。

14時頃、能登有料道路の崩落により、別所岳パーキングエリアでバスの観光客が孤立していると連絡があり、びっくりした。幸いにも傷病者がいない模様とのことで一安心したが、とにかく山から下ろさなければならぬ。早速マイクロバス3台で中島支所とパーキングの間をピストン輸送し救出した。16時頃、各病院に照会したところ人的被害は増えており、和倉温泉の

旅館についてもほとんど営業を見合わせたとの報告を受けた。通行止めも1カ所解除したが新たに3カ所追加される状況でした。

この日は、本部会議を4回開き情報共有と対策確認をし、24時間体制で本庁及び3支所に職員を配置して万全を期した。

断水箇所の復旧は夜を徹して行い次々と復旧させたが、再び別の断水箇所も出てきて終日対応に追われた。

2日目は、被害状況の把握及び安全対策として被災住宅の応急危険度判定調査を実施、避難所での健康相談、エコノミー症候群や生活不活発病の予防チェックを行い、保健センターでも24時間体制で健康相談の対応に当たらせた。

3日目は、被災住宅被害応急調査を7班14人体制と増員し、被害状況の把握がスムーズにできるように体制を整えた。また、全民生委員に協力してもらい災害ボランティアのニーズ調査も行った。

七尾市は、地震が余り発生しない地区だと言われていたので、地震対策には危機感があまりなかったように思います。幸いなことに防災訓練がすぐに役に立ったことと、日曜日で午前9時42分ということ、会社等が休みで、火災もなかったことが幸いでした。学校や保育園、幼稚園に生徒や児童がいたら大変なことになっていたと思います。特に田鶴浜保育園の内部を見たとき、もしここに園児がいたらと思うと、本当に冷や汗が流れた。

和倉温泉では、地震発生後、観光客のキャンセルが相次ぎました。旅館の被害も大きかったのですが、お客様に被害がなかったことが幸いでした。

震災復興後は、風評被害でお客様が戻らず、関係団体と協力し様々な復興イベントを開催しましたが、復興に時間がかかりそうです。

「地震は必ず起きる」ことを前提に、能登半島地震の教訓を生かし、災害に強い、安全、安心なまちづくりを進めなければなりません。基本は自分の安全・安心は自ら守ること、地域ぐるみで守ることだと思います。やはり一番頼りになるのは、地域防災組織であります。

今後は、各地に町会や民生委員などが参加する自主防災組織を作ることに力を入れていかなければならないと思っています。

最大の被災自治体、輪島市からの報告

輪島市長 梶 文秋

突然に大地が揺れた。かすかな地鳴りから一気に突き上げる衝撃と南北の大きな揺れ。経験のない強さだ。時間が長い、さらに強くなる、立っていることが出来ない。戸棚の上のテレビが飛び、冷蔵庫の中の物が流れるように落ちてくる。書架が倒れ、壁に掛けた額が躍る。大変な事態が起きた。飛び散った物の合間を抜けるように歩き、防災服を着て外に飛び出し、車に乗り込んだ。前方の道路では倒れた家屋やブロック塀が散乱している。市役所に向かうため、進路を変えたが別の通りでも何棟もの倒壊家屋があり、そこをすり抜けて行くという凄惨な状況であった。

市役所に着くと執務室のロッカーが倒れ、入り口を塞いでいる。市長室は書架が倒れ書類で無茶苦茶になっている。総務課で防災担当者をはじめ職員の参集を確認し、直ちに災害対策本部設置を指示した。総務班・情報収集班・連絡調整班・幹部職員等を集め、非常用電源が配備された対策本部室(大会議室)に、衛星電話をはじめパソコンや各種機材を設置した。「直ちに災害対策本部を設置する、各要員は速やかに作業にかかれ」。午前10時10分。永い闘いの始まりを宣言し、腹を決めた。

旧門前町庁舎に現地災害対策本部を設置した。門前町では平成18年10月、大きな地震とそれに伴う津波が発生したとの想定で防災総合訓練を1,300人規模で行ったばかりだった。しかし多数の倒壊家屋と高齢化率48.6% (旧門前町住民基本台帳ベース)の高さは、実際の災害と訓練との大きな違いを見せつけ、対策の大変さを痛感した。また地震発生の時期が年度末であることや合併からわずか1年2カ月という特殊な状況の中、数々の奇跡や異常事態に遭遇した。

「直ちに、指定された避難場所の全てを開設し、職員の配置を行うと共に、倒壊家屋に閉じこめられた被災者がいないか確認せよ」。「県を通じて自衛隊・緊急消防援助隊・日赤医療チームの出動を求めよ」。既存の防災用備蓄品では、被害の大きさに対応できない。物資班は緊急に県やインターネットで支援を求めた。ライフラインが寸断状態であるため、給水車の派遣支援や炊き出しの準備を要請した。かねて市にある航空自衛隊にお願いし、図上訓練CPXを災害対策本部訓練として実施していたことが大きな効果を発揮した。

また市庁舎の災害対策本部に隣接する部屋には、今回の災害が初めてとなる内閣府の現地連絡室が

いち早く設置された。同時に国土交通省の所有する衛星通信車が駐車場に2台、県の現地対策本部も市庁舎内に設置され、毎日の国・県・市町の対策会議がリアルタイムに内閣府を通して国の各省庁にも伝えられ、現地での各日の被害状況や対策を共有できた。内閣府の現地連絡室は、国土交通省をはじめ環境省、厚生労働省、農林水産省等の関係省庁派遣者による混成チームであったことから各種の相談もできた。

最も頼りになったのは、中越地震で大きな被害を受けた新潟県や同県各自治体職員がいち早く支援に駆けつけてくれた事であり、涙がこぼれた。特に発災日以降、次々と起きるであろう様々な問題点を自らの経験を踏まえ、本市職員に的確に指導して下さった。何日も…何人も…、本市に留まったの直接指導であり、「罹災証明」発行のための被害調査にも同行頂いた。その後の「被災者生活再建支援法」の相談業務等、被災者にとっても相談を受ける側にとっても悩ましく、指摘の事が現実によく発生している。しかし職員は狼狽せず冷静に対応し、一方では復興に向けた計画づくりにもあたる事ができた。深い感謝の気持ちを、この紙面をお借りして申し上げます。

避難所では富山県や福井県の保健師の方々にご活躍頂いた。高齢化率が県内一の地域での震災対策は、今後の大きな事例になると思う。本市でもスポーツ・インストラクターや保健師・保育士・保育園児等を一体(ふれ愛隊)として避難所に派遣し、高齢者の不活発病対策等を行ってきた。仮設住宅での対策も県の保健師の派遣を頂き、対応している。

防災担当大臣や衆議院災害対策特別委員会、国土交通大臣、安倍前総理等がいち早く調査や激励に現地入りし局地激甚として速やかな指定を頂き、加えて商店街や漆器産業等を支援する中小企業復興支援基金の創設・復興基金の創設等の道が開かれた。ただし復興は想像以上に大変なボリュームとなる。災害ゴミだけでも50数億円が必要となり、国の支援を受けたとしても必要な一般財源の捻出に苦勞する。半島先端の過疎自治体であり、財政力指数0.260の輪島市だが、何とか歯を食いしばり復興を果たしていきたい。

最後に、この紙面では書き切れないほど多くの自治体の皆さんやボランティアの方々にご支援を戴いたことに幾重にも感謝申し上げます、現地からの報告に致します。

能登半島地震の報告

珠洲市長 泉谷 満寿裕

平成19年3月25日午前9時42分。私は、「すず椿フェスティバル」の開会式で国民宿舎きのうら荘にいた。突然、強い揺れが襲った。揺れの最中、どこまで強まるのか、いつまで続くのかと思いながら、身の危険すら感じた。会場には多くの方々がいらっしゃったが、皆さん冷静で落ち着いていた。長い揺れがようやく収まると直ちに会場を後にし、市役所に向かった。揺れの度合いからして、一刻でも早く災害対策本部を立ち上げなければならないと考えていた。市役所に向かう間、沿道の家並みをつぶさに見たが、目に見える被害は発生していなかった。市役所に入る直前、情報を収集しようと消防署に立ち寄った。火災、救急とも出動要請は無く、既に各消防団が警戒と被害調査のため出動しているとのことであった。消防団の対応の早さを心強く感じた。

午前10時10分頃に市役所に入ると、既に各課室長は集合しており、直ちに災害対策本部を設置し、被害状況の把握に努めた。平成5年に発生した能登半島沖地震の経験が生きており、迅速な対応ができた。また、市内161の自主防災組織の長を兼ねる区長を通して、市民一人一人の安否確認を行った。午後3時過ぎには、家屋の損壊や負傷者など人的な被害、また公共施設や道路などインフラの被害状況を把握することができた。結果的に、軽傷者が3名いらっしゃったものの、電気、水道等ライフラインに関して大きな被害は無く、また住家の全半壊も無かった。全区長からの連絡により、市民全員の安否確認も速やかにできた。珠洲市の状況が

把握できたことから、午後4時30分頃、輪島市の梶市長と連絡をとり、早速、給水支援の手配をした。

翌日から、約15億円にのぼる公共災害の復旧と国に対する支援要望活動が続いた。特に輪島市と本市の境にある国道249号のトンネル「八世乃洞門」が崩壊し通行止めとなり、観光産業にとって大きな痛手となった。ゴールデンウィーク期間中の観光客の入り込み数は、対前年の半分となり、約8万人減少した。「八世乃洞門」近辺の天然塩の生産業者からは、売り上げが8割減となるなど悲鳴が上がった。

その後、全国の多くの方々から義援金や応援をいただき、また、国、県のご支援によって復旧が進んだことは感謝の念に耐えない。中でも、7月7日、約100日振りに「八世乃洞門」が通行できるようになった時の感激は忘れることができない。通行止めの解除とともに、多くの車が輪島側から堰を切ったように入って来た。改めて、「能登はひとつ」ということを実感した。

あれから、もう、1年半が過ぎようとしている。復旧工事はほぼ終わり、「能登ふるさと博」や東海北陸道の開通の効果もあり、観光客の入り込みも回復してきた。「八世乃洞門」の新トンネルの工事も進めていただいている。災害時において最も重要なのは「地域の絆」であることを痛感したことから、災害時要援護者の「見守りマップ」の作成や、「地震防災マップ」の作成と住宅の耐震改修工事費等補助制度の創設、より実地的な防災訓練の実施等、市全体で防災力の強化に取り組んでいるところである。

能登半島地震体験記

志賀町長 細川義雄

能登半島地震の第一報を受けたのは、病院のベッドの上でした。慌ててテレビをつけると、既に能登半島地震の特別番組が放送されており、その映像を見て愕然としました。

私は、当時入院加療中でありましたので、被災地の陣頭指揮を執ることができず、歯がゆい思いをしておりましたが、区長さんをはじめ、住民の皆さんには率先して被災者の安否確認や被災状況の把握に務めていただき、避難所の開設にも奔走していただきました。また、職員も昼夜を問わず、幹線道路や上下水道の仮復旧作業に従事するとともに被災者の支援に全力を尽くしました。

退院後、速やかに特に被害の大きかった笹波、鵜野屋、富来領家町などの避難所へ駆けつけ、お見舞いを申し上げましたが、逆に私の病状を気遣っていただき、被災住民の方々から元気付けられたことが強く思い起こされます。

さて、地震から1年が経過いたしました。その間、幹線道路や上下水道の本復旧、被災者の生活支援を行うための住民相談の実施に全力

をあげ、一日も早い復興に努めて参りました。おかげをもちまして町の主要施設の復旧は、概ね完了し、住民の日常生活も落ち着きを取り戻してきております。

また、現在仮設住宅で不便な生活を強いられている方々も、それぞれ住宅再建の目途が立ち、仮設住宅を出られる日が近いと聞き、ほんの少し肩の荷が下りた気がすると共に、新たに建設される住宅が三十数棟もあり、住民の皆さんの力強さを実感しております。

最後になりましたが、本町がここまで早く復興の道を歩めたのも、全国の多くの皆様から寄せられた励ましの言葉や心温まる義援金、国、県の全面的な支援の賜物と深く感謝申し上げます。

私どもは、この能登半島地震を後世に末永く語り継ぐと共に、この地震で得た教訓を活かし、今後は、自主防災組織の立ち上げや強化を行うと共に、消防署、消防団の活動施設と福祉避難所を併設した防災拠点施設の建設などを行い、安全、安心の町づくりに努めて参ります。

災害に強いまちに

中能登町長 杉本栄蔵

当時を振り返れば、これまでに経験したことがないような大きな揺れと度重なる余震に襲われ、町民一同、不安な日々を過ごしたことが鮮明に思い出されます。

地震当日、私は早朝から地区行事に参加しておりました。行事が終わり、家の居間で新聞を広げたところでした。突然の大きな揺れに襲われ、家具がガタガタ動きはじめました。地震だと思い、私はとっさにストーブのスイッチを止め、揺れがおさまるのを待ちました。

ようやく揺れがおさまり“ほっ”としながらも、町内にも被害が出ているに違いないと思い、私は急いで役場に向かいました。車での道中、ラジオから能登半島沖が震源で、中能登町の震度が6弱であることを知り、規模の大きさに驚きを覚えました。

登庁後、まず災害対策本部を設置するとともに、町内の被害状況の把握と、消防や警察など関係機関への協力要請を急いで行うように指示を行いました。地震発生直後、職員による被害状況確認、区長や民生児童委員との連絡及び情報収集を素早く行うことができたのは、地震発生の半年前に行った防災訓練の成果であったと思います。

国や県の支援を受け、道路の復旧や被災家屋からの瓦礫の搬出は終了しましたが、地震発生

から1年が経過した現在も町民の生活の復興支援は続いております。幸い、地震により家を失った方、全員の住宅復興に目処は立ちましたが、その一方では地震による怪我が原因で今も病院のベッドの上で寝たきりの生活を余儀なくされている方や、家を失った精神的なショックから体調を崩し、今なお通院されている方もおり、町民の皆さんの生活が元通りになるにはまだまだ時間がかかりそうです。

昔から「災害は忘れた頃にやってくる」と言われ、現に新潟県の中越地方では、平成16年の震災から3年後に再び大地震に見舞われております。現在、町ではこの現実を忘れず、建築物の耐震化の促進やライフラインの強化を進めているところですが、今後もこの地震により明らかになった様々な課題・問題点に対する対策を行い、災害に強い「安心・安全なまちづくり」をさらに推し進めるとともに、町と町民の皆さんとが一体になり「協働の心」を大切にしまちづくりを行って参りたいと思います。

終わりにあたり、全国の皆さまから心温まるたくさんの方の激励をいただきとともに多くの義援金をお寄せいただきましたことを、町を代表して厚くお礼申し上げます。また、被災された皆さまが一日も早く平常の生活に戻れますよう心よりお祈り申し上げます。

震災体験から復興に向けて

穴水町長 石川 宣雄

平成19年3月25日は、好天に恵まれた春日和の日曜日、私は、4月からの中学校再編に伴う向洋中学校の閉校式に出席をしていました。会場となった体育館には、生徒、教職員、校下の方々など多くの関係者が出席し、やがて始まろうとしていた午前9時42分、突然、これまでに経験をしたことのない大きな揺れに立ちすくみ、一瞬にして大混乱となり、生徒などを屋外に誘導する大きな叫び声が響き渡ったことを、今でも克明に覚えております。

その後、役場に戻り、災害対策本部を設置し、安否などの調査・確認の指示を行いました。幸い、区長町内会長、民生委員、婦人会などの方々が手分けして確認作業を行っていただいたことで、2時間余りで確認がとれたことで、行政と地域とのネットワーク、絆の大切さを再認識いたしました。

震災2日目頃から、全国各地より温かいご支援の申し入れがあり、自分たちではとても手が回らないところ、経験したことのない業務を、国、県の他、多くの自治体などから、調査やご指導を行って頂いたほか、職員等を回せないような被災家屋の片付けや清掃などの作業を多くのボランティアの方々に担って頂きました。

さらに、国・県でも、直後から現地本部を設置し救援や応急対策などのご指導をいただいたほか、県独自の手厚い支援策など、スピード感をもって対応していただいたことで、被災者の再建意欲を喚起するなど、大変心強く、おかげで大きな混乱もなく、応急から復旧復興に移行することができたことを深く感謝しております。

次に、本格復興に向けた取り組み状況ですが、その土台を固める復旧作業を先行して進め、その間に復興プランを策定し、本格復興を目指すことにしましたが、当町では町の玄関口であって、商店街を形成する中心市街地に被害が集中したことで、①市街地の再建、②商店街の再生、③住宅の再建を一体的に取り組むことが必要となりました。このため、復興の方向性や施策を円滑に推進するためには、町、地域住民商店街などとの協働体制を強化することが前提要件であるとの思いから、商店街ごとの復興委員会や町民の誰もが参加できる「ふれあいサロン」を設置するなど、今後のまちづくり活

動にできるだけ多くの関係者が参画できるような体制づくりに努めたところであります。しかし、大型店の進出や後継者不足などで、商店街としての活気、賑わいが薄れていたこともあり、総論と各論に温度差もあるなど、厳しい一面を抱えながらも、毎回20人余りが集まり、賑わいのあった商店街になるには「これが最後のチャンス」、「次の時代にも評価されるまちづくりが必要」との積極的な意見も多く聞こえるなど、ハード、ソフト両面にわたり、活発な議論が行われました。

このような、経緯と国・県の特段のご配慮によりまして、シンボルロードや住宅再建の受け皿となるミニ区画整理事業などを盛り込んだ「復興計画」が3月14日開催の策定委員会で決定されました。

この計画による復興の目標は、単なる復旧ではなく、震災から得られた教訓を生かし、震災をバネに安心・安全で活力あるまちづくりに取り組むとともに、将来の穴水町を担う人材が育つまちづくりを目指し、「安心・安全」「活力再生」「人材育成」の3つをキーワードとする町づくりを復興の目標としたところであります。

また、計画策定と併せ、諸課題の解決に向け必要な施策を県の復興プランに盛り込んでいただくために、関係者とともに要望活動も展開してきた結果、区画整理事業については、県当局の素早い対応によって事業認可の交付をいただくことができました。

さらに、真名井川の護岸は親水空間としての整備や、モデル住宅では店舗併用住宅など、当町の実情に配慮した計画をご提示いただくなど、本格復興に向けた道筋を確実なものとしていただきました。

平成20年度には、駅前などの遊休地を活用したシンボル施設の整備を含め、災害に強い町づくりのための計画を策定し、出来るだけ早い時期に完成させたいと考えております。

最後に、少子高齢化そして過疎化が進み大変厳しい環境ではありますが、「小さな町だからできない」というのではなく、「小さな町だからこそできる」というきめ細かな住民サービスを心掛けながら、新しい穴水まちづくりに努めます。

能登半島地震を体験して

能登町長 持木一茂

平成19年3月25日午前9時42分頃、突然の揺れは激しさを増し、ズドンという轟音の後、今までに経験したことの無いくらい大きく自宅が揺れました。

能登半島地震であります。

能登町においては、震源地から離れてはいたものの、震度6弱の揺れを観測し、人的被害は重軽傷者12人、被災家屋1142戸という被害内容であり、また、町道の通行止めや上下水道管の被害など、ライフラインについても甚大な被災を受けました。

地震後、役場庁舎に駆けつけたときにはすでに数人の職員も登庁しており、すぐに災害対策本部の立ち上げを決定し、被災者の調査確認とその支援、ライフラインの被災箇所調査や応急処置等を指示し、復興に向けての日々が始まりました。

今まで地震の少なかった能登町においては、日頃より災害の準備はしていたものの、今回のような大地震というものは、正直想定外の災害であり、当時行政として最善の支援を目標に、職員とともに慣れない地震復興作業に取り組みましたが、今にして思うと処置や指示が充分であったのかどうかというのは疑問に思うときがあります。

さらに、日を追うごとに被害の情報が寄せられ、テレビでの報道などの映像からも、被害の大きさをまざまざと実感するとともに、余震も頻発していたので二次的被災の心配と、復興が完了するのはいつになることかと終わりの見えぬ作業に不安を感じずにはいられませんでした。職員のみならず地域住民も一丸となり復興に向けて頑張ったおかげで、年内には震災前の普段通りの生活に戻ることが出来たのではないかと感じております。

今回の地震で被災された方々のために、全国より多くの支援が寄せられ、能登町においても千件を超える義援金と多くの支援物資をいただ

き、人の心の温かさを感じるとともに、感謝せずには居られませんでした。

この心遣いのありがたさはとても貴重な経験であり、その後の復旧作業だけでなく、中越沖地震などの震災地への職員派遣などにも生かされているものと考えます。

それと、地震の災害において風評被害というものも大きいものと痛感いたしました。

その風評被害の対策において、ソフト面の復興を試みたので少し紹介したいと思います。

まずは「元気いっぱい能登町 あなたの真心ありがとう」というステッカーを手作りで作成し、企業や学校にもお願いして郵便物、会議資料、車両等に貼り付け、町内外に向けて地震復興に元気に取り組んでいる姿勢と、全国からの心温まる支援に対する感謝の気持ちを少しでもアピール出来ればと試みたものでした。

また、地元県立青翔高校にお願いし、修学旅行先の長崎県にて地震復興のPRチラシを、高校生の手によって配布活動を実施してもらい、地震復興アピールに一役買って頂きました。

地震復興のためにはこれらソフト面の対策も非常に重要であることを再認識させられ、このような試みが風評被害に対して十分な成果があったとは言えませんが、能登町を何とかしようという気持ちから、皆が知恵を出し合い行動に移すその過程が大切であり、人々の団結無しには復興は難しいと痛感いたしました。

これらの教訓を生かし、日頃より災害に対する準備はおこたらず、万全の準備を心がけ、町民が安心して暮らせる町づくりを目指していかなければならないと考えます。

最後に今回の能登半島地震により被災された方々に改めてお見舞い申し上げ、一日も早い復興を心から願いますとともに、心遣いをしていただいた方々に感謝申し上げます、私の体験記といたします。

能登半島地震震災体験手記

奥能登広域圏事務組合消防本部輪島消防署 国永 剛

平成19年3月25日8時30分から当日の勤務に就き始業点検等終了後、車庫清掃を行うため庁舎内すべての車両を、庁舎向の三角州駐車場に移動し清掃を開始する。

車庫清掃終了後、車両移動のため玄関前の歩道で、突然突き上げるように上下左右に激しく揺れ、今まで体験したことのない揺れを感じ、揺れがおさまるまで何もできず立っているのがやっとだった。揺れの最中、目に入ったのは庁舎玄関ポーチと、犬走りの段差が大きく上下動し、庁舎が浮き上がると同時に犬走りが下がり、建物と地面に大きな段差ができた。その後、すぐに庁舎の横揺れが始まり、揺れのおさまるのを待って庁舎両側に流れる鳳至川、河原田川の対岸鳳至地区、河井地区に車両を移動する。移動中、橋と道路のつぎ目には大きな段差ができ、走行に支障をきたす状態である。

移動後すぐに、河井町地内において「木造倒壊建物内に1人が生き埋めになっている。」との119番通報により、救助工作車3人で北側約1km先の現場へ向かうが、途中市街地の雰囲気がいつもと違い静まりかえり、車両、住民の往来等もなく奇妙な雰囲気を感じながら現場到着する。

現場は、朝市通りのはずれに位置し、付近に多数の観光客らしき人が目に付くと共に、建物1、2階部分は押しつぶされ2階屋根が道路にはみ出し、倒壊した建物横の道路上に横たわる年配の女性1人と、付き添い1人の女性が確認でき、付近の住民で救出した女性であることを確認し、救急隊に引き継ぐ。引き継ぎ中、同河井地区約250m離れた場所で「倒壊建物の下敷きになっている。」と、さらに救助要請指令を受け現場へ向かう。

倒壊建物は、木造2階建て瓦葺き、1、2階部分は押しつぶされ木材等の破片が道路上に散乱し、原形をとどめているのは屋根部分だけで、2階軒先は道路上から数十cmの高さに位置し、周囲には付近住民と思われる多数の人が立ちつくす姿が認められる。

家族の情報をもとに、安否を確認するため倒壊建物上から大声で呼びかけるが最初返答はなく、何度かの呼びかけに僅かな応答があり、生き埋めによる場所の確認をするとともに、発掘位置、除去木材等の集積位置の指示を行い、消防隊3人、救急隊員4人を増員し、さらに地元消防団

員10人の計20人による救出活動を開始する。

瓦礫の山と化した建物を、救助工作車積載のチェンソー・鉄線カッター、ポンプ車に積載してきたチェンソーを使用し木材等を切断するとともに、1つ、1つ手作業により取り除き、要救助者に接触、接触時要救助者は梁と床の僅か30cmの間に身動き出来ず挟まっていたが救助開始49分後、1階居間に横たわる74歳の女性を救出した。要救助者は長時間生き埋めになっていたため体力はかなり消耗していたが、軽度の打撲のみで救出することができ、救急隊員に引き継ぎ帰署につく。

帰署すると当務、非番員の全員が出動しており、通信係員が現場との情報連絡に追われており、帰署報告を行うと同時に「鳳至地区の住宅地排水路から、油の漏洩事故が発生しているため漏洩もとの確認。」の出動指令を受け現場へ向かう。通報者と合流し、流れている排水路の油膜を確認するとともに、上流約50mに家庭用屋外灯油タンク(90L)の配管亀裂を認め、バルブを閉めると同時に持ち主に事情を説明し、修理を依頼し状況を本部へ報告する。報告後は、鳳至地区倒壊建物の調査指示を受け、調査にあたり、至る所で住宅の倒壊があり、生き埋め、けが人等の確認を行うが生き埋め、けが人等の情報もなく、倒壊建物当事者だれ一人悲観的な者は居なかった。

多くの倒壊家屋があつたにもかかわらず一件の火災もなく、また倒壊による生き埋め等による件数が少なかったことが不幸中の幸いであり、もし、火災と救急、救助活動が同時にあつた場合には、はたして消防の機能を十分に発揮できたのだろうか。

平成16年10月23日に発生した震度7の新潟県中越地震で、緊急援助隊石川県隊の参加救急4隊のうち、奥能登広域圏登録救急隊として新潟県へ派遣され、24日13時に長岡市に到着し、長岡市消防本部を中心に2日間、計8人の救急患者を搬送したが、まさか自分が震度6強の地震体験をするとは予想だにできなかったことであり、二度と経験したくないことだが、消防職員として中越地震の緊急援助隊としての参加、また能登半島地震震源地の当事者として、倒壊建物から要救助者の無事救出等、貴重な体験をしたと思う。

大災害を体験して

輪島市消防団諸岡分団長 四柳末吉

地震発生時、私は仕事で親戚の住宅の天井張り替え工事をしていました。沖合いからドーンとものすごい音がしたかと思うと、すさまじい揺れに襲われました。最初は上に大きく持ち上げられ、次に大きな横揺れがやってきました。私は足場の上に乗っており、一時は何も出来ず体も動きませんでした。揺れが静まり、これは大変なことが起こっているなどと思い、この家も内壁が一部落ちただけで大事に至っていないことを確認してから、自分の立場上、諸岡地区分団管轄に戻りました。その間、道路の隆起や亀裂、電柱の傾き、垂れ下がった電線に目を丸くしながら、やっとのことで家までたどり着きました。妻が会社休みだったので、どうしているかと心配しながら家に入ると階段が持ち上がり、内壁には亀裂が生じ、部屋を見渡すとタンスが倒れて中のものが放り出されていました。台所でも食器棚が倒れ、鍋や茶碗などいろいろな物が散乱し、冷蔵庫は違う場所にあり、戸は開き、足の踏み場もなくすごいものでした。妻の安否が心配ですが、家のどこにもおらず、とりあえず災害時の避難場所である公民館の高台まで行くとようやく妻の無事な姿を見つけ、やっと安心できました。

誰もが経験した事がない大惨事です。近隣住民が戸惑いながら、大変だ大変だと口々に言いながら自主避難している姿を目にした時、一昨年前の平成18年10月、地震発生時の防災訓練を思い出しました。多くの地区住民が参加し、その訓練で培った防災意識の向上が、今回の地震で役に立ったと思っております。

避難場所では各地区の世話をする人たちがプラカードを持ち、その周りにその地区住民が集まりました。お互いの生存を喜び、安否を気づかい、励まし合っている光景がたくさんありました。そうこうしているうちに、津波が来るぞという話が起り、一時パニック状態になりました。その話は一人の人が津波が来たら大変だなどという話が口伝えで今津波が来るという話になったのでした。私は、今この地域に何が起っているか、どうしたらよいかという情報を住民に早く知らせて安心させてやるのが大事な事だと思いました。

集まった分団員から、家を出ると同時に家が倒壊した、危機一髪だったとの話も聞きました。私はこれからの分団の行動を何からやるべきか

を団員に指示しました。まず、火災の発生に備え、ポンプ車を待機させ、いつでも出動できるようにしました。幸いにして火災の発生も人命救助の要請もありませんでした。次第に避難所に集まってくる人も多くなり、中には顔や腕、頭などにタオルをあててケガの手当を求める人たちがやってきたため、救急車の手配をポンプ車の無線で行いました。負傷者は知り合いの人に病院へ搬送してもらい、私たちはテントの設営と公民館からイスを高台まで運びました。続いて各家庭のガスの元栓の閉栓の確認、体の不自由な老人が家の中にいるから見に行ってくれとの依頼を受けて、現場に分団員を向かわせるなどしました。家の玄関で助けを待っていた車椅子のお年寄りに大変感謝されたと報告を受けております。

翌26日早朝には、県内外より救助隊やポンプ車が集結しました。我々の分団は大生、まんだら村の道先案内を行い、住民の生存確認や用心池、消火栓の点検にも励みました。引き続き、消防団は家屋のブルーシート張りを行うことが決まりました。各分団の応援もあり、ブルーシート張りは無事、完了しました。団長に、分団長として各分団も大変な時なのに、あえて他の分団の応援を求めることは心苦しい思いを伝えると、お互い困っている分団の応援をするのが我々消防団の使命でもあるとの言葉をいただき、胸が熱くなりました。そしてお前の所は全体的にどの地域より被害が大きいが、分団員に頑張ってくれるよう励ましの言葉もいただきました。4月1日、大方の作業が完了し、消防団災害対策本部は解散しました。この間、遠く一時間以上かけてこられた分団、毎日作業にあられた各分団の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。本当に有り難うございました。

最後になりますが、この震災を通して思ったことは、災害は忘れた頃にやってくるという定説を捨て、災害はいつでもやってくるということを心に刻み、その対処法を日ごろより心得ていることが身の安全を守る上で大切だと感じました。この地に来られたボランティアの方々、行政機関、関係者各位には大きな力をもらいました。本当に有り難うございました。これから後、一日も早く復興にむけて地域作りに頑張っていきます。

復興を願って

石川県警察本部警備部機動隊小隊長 松村 圭

その地響きと轟音は、機動隊での当直勤務に就いた直後、突然やって来ました。

機動隊長以下自主参集員は一次部隊として輪島方面へ出動、私は連絡体制を整えた後、二次部隊の指揮官として穴水・門前方面へ出動しました。

能登有料道路は至る所で陥没し、緊急走行もままならない状態でした。

そんな折、鳴り止まぬ無線の中、警備本部から我が部隊に指令が下りました。

「別所岳SA（サービスエリア）に観光バス3台等が避難中。

道の駅で七尾市職員と合流し、SAで孤立している乗客等140人の避難誘導にあたれ。」

我々は直ちに有料道路を降りて市職員と合流、救出方法の検討を行い、「林道を使ってマイクロバスでSA直近の側道まで行き、孤立した乗客らを順次ピストン輸送で避難救出する」という方針に決定しました。

時は午後3時を過ぎ、地震発生から5時間以上経過していました。体調を崩している高齢者や子供がいるかと思うと一刻の猶予もないと思い、直ちに活動を開始しました。

林道を通してSA付近まで行くと、本線上の観光バス3台が確認できました。

私は隊員を指揮し、一目散に手前のバスへ走り、車内に駆け込みました。

「助けが来たぞ」の声。乗客の皆さんの顔が一斉にパッと明るくなり、車内全体が安堵した空気になるのを感じました。

私は逸る気持ちを抑え、努めて穏やかに乗客の皆さんに声をかけました。

「警察です。遅くなってすみません。これから皆さんを役場までお送りします。小さなお子さんや高齢の方を優先に、順番にマイクロバスに乗って下さい。」

乗客の皆さんから、「ありがとう」「お願いします」と、言葉を掛けて頂きました。

幸い、体調を崩しているとの訴えは一人もなく、私も内心、胸を撫で下ろしました。

乗客の皆さんは長時間、不安の中で過ごした

にもかかわらず、誰一人不平不満を口にせず整然と行動して下さり、逆に私の方がお礼を言いたい気持ちになりました。

こうして、観光客等137人全員に、中島支所まで無事、避難して頂きました。

その後我々は旧門前町へ移動、住民の皆さんの安否確認にあたった後、深夜に中島地区の小学校に到着、体育館で仮眠を取りました。

午前4時、我々は全世帯の安否確認のために旧門前町道下地区へ出発しました。

道が波打つように陥没し、倒壊家屋が道を塞いでいる惨状に、言葉を失いました。

落胆する間もなく、「道下地区で全壊家屋内に人が取り残されているおそれあり。搜索、救助にあたれ」との無線指令を受け、現場へ急行しました。

地元消防署、消防団と協力して倒壊家屋の屋根に登り、屋根瓦と屋根板を剥がし、中に人がいない事を確認、住人の方とも会え、無事を確認する事が出来たのです。

出動した全隊員が、改めて日頃の訓練の大切さを強く感じていました。

私は、能登半島地震でのこれらの災害活動を通じて、「県民のために活動する」という任務の尊さを、身をもって実感しました。

被災された方々からの感謝の言葉の一つひとつや喜びの姿が、我々現場で活動する警察官にとって、何にも勝る原動力であったことは間違いありません。

我々は、今回の災害活動で感じたこの思いを心の支えとし、今後も職務に励んでいきたいと思っています。

しかし、もう二度とこんな災害は起こって欲しくはありません。日頃の災害救助訓練や災害用装備を必要とする日がもう来ないで欲しい、という願いは今も変わりません。

最後に、県警察職員一同、この地震で亡くなられた方とご遺族の皆様へ謹んでお悔やみを申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興を、心よりお祈り致します。

北陸電力の地震対応について

北陸電力株式会社七尾支社長 竹原利一

北陸電力では、供給区域内で震度6以上の地震が発生した場合、本店ならびに当該地震が発生した店・支社・所およびその他事業所は、自動的に非常体制に入り、すみやかに対策組織を設置するとともに、従業員は呼集を待つことなく、あらかじめ定められた基準に基づき、原則として所属事業所に参集することになっている。

平成19年3月25日9時42分に発生した能登半島地震においても、発生後直ちに本店に非常災害対策総本部が設置され、10時37分、テレビ会議システムを利用して全店社を対象とした第一回非常災害対策総本部会議を開催し、総本部長（社長）の指揮の下、被害状況の把握に努めながら全社的な応援体制を確立して、早期復旧に向け懸命の復旧活動を開始した。

地震発生直後に発生した約16万戸の停電戸数は、地震発生後の10分後の9時52分には送変電供給支障が解消して配電設備被害による約1,000戸程度となり、18時15分には倒壊家屋等の7戸を除いて解消（26日16時50分すべて復旧）した。また、石川県が設置した応急仮設住宅には、電気温水器323台およびクッキングヒー

ター317台を無償貸与した。

地元支社として特に考慮したのは、①自治体災害対策本部への要員派遣②送電後の二次災害（火災）の防止③電気給湯器の配管不良対応であった。①については、災害復旧において地元自治体への情報提供が大切であるとの教訓を先輩から頂いていたからであり、②③については、阪神・淡路大震災において屋内配線の絶縁不良による火災の発生や、送電後も配管不良により電気給湯器が使用できないという問題が指摘されていたからである。

震災の復旧・復興のボランティア活動に約1,500人（延べ）の社員が参加し、当社設備の復旧作業に約8,100人（延べ）の社員及び施工者が従事した。最終的には12月26日、門前・深見地区での道路復旧を待っての電柱建替え工事をもって完了となったが、比較的早期に復旧できたのは、住民の皆様の生活習慣、及び道路事情、並びに国・県・地元自治体との連携と指導力によるところが大きいと考えている。とりわけ復旧作業に支障となる火災の発生がなかったことは住民の皆様のお陰と感謝している。

能登半島地震からの教訓

西日本電信電話株式会社金沢支店設備部災害対策室長 榎 敏明

地震発生時は日曜日早朝で、私は金沢の自宅で家族と共にくつろいでいる時でした。普段感じる事の無い大きな揺れに「あっ。やばいな」と漠然とした不安を感じた事が印象として残っています。火の元と実家、親戚の安否確認、幸い金沢周辺であったため棚から食器が飛び出す程度で済み、家屋被害、けが人などはいませんでした。

その後、通信設備への被害が大きくない事を願いながら、会社へ向かいました。日曜日早朝ということで、出勤している社員はほとんどおらず、災害対策本部員及び復旧班員の参集の遅れが心配でしたが、ニュースなどで知った対策員や日ごろの情報連絡訓練の成果により、発生から30分で災害対策本部の設置が出来ました。

災害対策本部の設置後、ただちに現地被災状況の確認としてNTT七尾及び金沢ビルより調査班が出動しました。被災地に近いNTT七尾支店の社員の中には、自宅が被災したが、家族などの安否を確認すると、直ぐに会社に駆けつけ通信設備の点検・復旧に当たった社員もいました。

そのころの通信状況としましては、全国からの見舞い通話などにより石川、富山エリアの電話が非常につながりにくい状態（輻輳）となり、9時56分より、災害用伝言ダイヤル（171）、災害用ブロードバンド伝言板の運用開始、安否確認や集合場所の連絡手段などとしてサービス提供を開始しました。対策本部でも通信輻輳や現地の混乱により情報収集がなかなか難しかったです。特に輪島市周辺では、電柱の倒壊などにより電話が非常につながりにくい状態となっており、現地からの情報もなかなか入りませんでした。そのような状況の中、県庁災害対策本部及び輪島市役所災害対策本部へNTT社員を参加させていただくなどして情報収集に努め、重要通信確保としてポータブル衛星通信装置を当日中に、輪島市役所を含め3カ所（25回線）に設置しました。なお、衛星通信確保には、装置への電源提供が必要となり、災害対策員が昼夜監視のため車中泊など、その運用面での課題も新たに分かりました。

さらに翌日には、地域住民や避難住民への通

信手段として、集会所・避難所に特設公衆電話（無料）を37カ所（58回線）取り付けました。特設公衆電話の設置には、県庁及び各自治体との調整が必要であり、正確な情報の入手が重要となりました。通常であれば、かなり多くの時間を要するところですが、県庁・輪島市役所災害対策本部への参画などにより、早期の開通が出来たことは非常に良かったです。まだ寒い時期、夜中3、4時ごろまで屋外工事に携わるNTTグループ及び通信建設会社の社員には頭の下がる思いです。また携帯電話が普及した中、避難している方から感謝のお言葉を頂いたことは忘れることが出来ません。

能登半島地震では、災害対策用伝言ダイヤルは3月26日から30日までの5日間で合計37,734件の利用を頂きました。石川県外から石川県への電話は、最大で平常時の24.6倍に達しており、災害用伝言ダイヤル、災害用ブロードバンド伝言板の重要性を改めて感じました。また、被災地の自治体通信、避難所への通信確保（特設公衆電話設置）など、被災直後における早期の通話確保は、NTTグループ内の連携のみではなく、県庁をはじめ各自治体との連携が不可欠であることを再認識し、今後の有事の際での対応を取って行きたいです。

今回発生した能登半島地震は、通信サービスの安定的な提供を使命と考える私たちに災害時などにおける通信サービスの確保の試練を与えられたものと思います。NTT北陸グループ・通信建設会社社員らが一丸となり、昼夜を通し3月25日から30日までの短期間で、被災した通信設備の復旧や被災したお客様の早期通信サービスの復旧を達成できたことは、通信を守る私たちの大きな自信になりました。

また、地震より1年の経過を機に、NTT北陸グループ社員等の危機管理意識を高めるため、帝京大学教授志方俊之先生による講演「新しい危機への対応」など防災危機管理セミナーを平成20年3月19日に行っています。「災害は忘れた頃にやってくる」—ありふれた言葉ですが、能登半島地震の大きな教訓として、今後も「いつでもお客様に安心して使って頂ける通信サービスの提供」を目指して行きたいです。

被災住宅への支援活動

財団法人石川県建築住宅総合センター理事長 照田繁隆

地震の直後、県からの応急危険度判定士の派遣要請に応じて、関係団体が協力し28日29日の両日約50人を現地に送り出したそのあとすぐ、今度は被災地（穴水町）で住宅相談を実施するよう要請がありました。当センターは従来から「いしかわ住宅相談・住情報ネットワーク」の事務局として、県民からの相談に対応していたので、直ちに各構成団体に連絡して動員態勢をとりました。各団体に対し2～3人の派遣を依頼するとともに会場の手配、住民への広報の依頼、ボランティア保険に加入するなどの準備、相談員の名札や受付簿、相談内容の記録票の作製、筆記用具など事務用品の準備、さらに弁当とお茶の手配など細かな作業をすぐにおこないました。また相談態勢は、建築士、木造に詳しい大工さん、不動産関係、融資関係、契約関係など日頃のネットワークを利用し、住宅に関する様々な相談に対応できる態勢を整えました。

震災後最初の土曜日の3月31日、まず穴水町役場の地域情報センターで相談を受け付けました。朝10時の開場前から廊下は相談に来られた町民でいっぱいになり時間を待たずに開場しました。来られた皆さんの多くはお年寄りで、被害を受けた住宅に大きな不安を抱えておいでになり、とにかく被害を受けた住宅を見てほしい、応急判定で赤や黄の紙を貼られたが、修繕が可能なのか除却するしかないのか現地へ来て見てほしい、あるいは応急の安全対策を教えてくださいという相談がほとんどでした。しかし、現地へ行ってもまだ家具が散乱しており、床下・二階梁・小屋裏などが見られない建物が多く、それでも作業服にヘルメット姿で身の危険を感じながらもできるだけの調査をしました。この日は50人、翌日曜日は54人の相談者がありました。

この経験を基に、関係団体で協議した結果、輪島・門前地区でも同様の支援が必要だろうと、次の週末から4月いっぱい各土・日曜日に輪島市役所、同門前支所を加えた三箇所で開催しました。大勢の方が相談に来られ

ましたが、4月末には各会場とも一日の相談者が十人未満となり、当面の役割は終わったと判断して終了しました。結果、送り出した相談員は延べ380人、来場した相談者は受付された方だけでも548組にのぼりました。この相談会がどれだけ罹災者のお役に立てたかはわかりません。震災直後の混乱した状況の中で、私達もこのような状態の住宅を見るのは初めてなので正直に自分の判断や意見をお話するだけでしたが「修繕可能と聞いて安心した」「専門家が見てダメならしかたがない除却する決心がついた」などの話を聞くと多少なりともお役に立てたのではないかと思います。

その後、被災地では本格的な再建・修復が始まり、8月には県が復興基金を設立し、罹災者に対する住宅再建支援が開始されました。この動きにあわせて、当センターは現地での相談会を再開しました。今度は住宅を再建しようという人のための設計の相談や修繕・増改築・耐震工事に関するアドバイスなどが中心です。

相談内容も具体的で再建住宅の設計や資金計画、修繕の工法などに関する相談などがほとんどです。また、ふるさとモデル住宅も完成し多くの人が見学に来られると同時に相談をされております。今後は、仮設住宅の期限いっぱいまで、長期間ですが、能登の復興のため少しでもお役に立てるよう、この活動を続けて行きたいと思っております。

最後に、ボランティアとしてこの活動に参加いただいた関係団体の皆様に感謝申し上げます。

参加団体

- (社) 石川県建築士会
- (社) 石川県建築士事務所協会
- (社) 日本建築家協会北陸支部
- (社) 石川県建築組合連合会
- (社) 石川県宅地建物取引業協会
- (独) 住宅金融支援機構
- 石川県消費生活支援センター
- (財) 石川県建築住宅総合センター

地元建築士会の取り組みについて

社団法人石川県建築士会輪島支部長 高出正次

地震発生当日は日曜日の10時近くということと在宅者も多く、曇天と条件的にも救われ、輪島市内に限っては全壊330棟、大規模半壊380棟、その他450棟の住家、非住家の被害があり、人的には死亡1人、重軽傷者90人の被害がありました。何分火災がなかったのが何より幸いして、二次災害を免れたと思います。

応急判定の結果について

輪島市調査数5653件のうち「危険」865件中、木造850件、RC 8件、S造7件「要注意」930件中、木造905件、RC 7件、S造18件。延判定士数158人の方が79班に分かれて調査を行ったそうです。

周辺の状況

地震時の自宅や事務所の被害は最小限で、木造家屋の一部損壊で済んだのでほっとしていますが、一時錯乱状態になりました。通りを歩いてみると、木造家屋には全壊、大規模半壊の家屋がかなり目立ち、非木造のビル等の壁面クラックなども外観から目視されました。通りは瓦やガラスが散乱し、道路には割れ目や段差が付き歩行困難なほどの所が多数見受けられました。

地元建築士会の取り組み

県内外からの関係者より見舞いや被害の問い合わせが殺到しパニック状態でした。冷静になり考えますと、まず災害に対しては住む場所の確保が大切と思い、罹災された市民の住宅、その他家屋の損壊について建築の相談窓口を設けることとし、建築士会会員を招集しましたが、役員をはじめ会員の多数が何らかの被害を受けているので対応に苦労しました。何分初めての経験、何からどうしてよいかと試行錯誤でした。それでもどうにか関係者の方々のアドバイスも受け、市役所ロビーの片隅で受け付け窓口を設けました。

1. 相談窓口の担当者の割り振り
2. 相談カルテ用紙、事務用品の準備

3. 仮設電話の準備
 4. 暖房用ストーブの準備
 5. 関連ボランティアの受け付け
 6. 現地調査担当者との打ち合わせ
- 等を手配し、なんとか相談窓口を立ち上げることが出来ました。

遅ればせながら4月2日よりスタートしたわけですが、初日はPR不足で相談者は少なかったのですが、2日目より28件、3日目66件、4日目18件、5日目12件、6日目11件、7日目21件、8日目32件、9日目14件、10日目14件、11日目17件、12日目20件、30日目15件、14日目6件、15日目7件、16日目5件、17日目5件、18日目以降全体で20件となり一日の件数が少なくなったので土日に限り、相談を受けることにしました。

相談受け付けの前半は、点検調査担当者との調査日の調整で大変苦労しましたが、約300件の申し込みに対して関連団体ボランティアの協力を得て、アドバイス診断を終えることができました。尚、建築組合の会員と製材組合の方々のボランティアのおかげで仮筋違い入れ、サポート入れの応急措置をほどこし、大変喜ばれた家庭もありました。ただ地元では、漆器産業や酒の醸造元が多くあり、経過年数のたった土蔵が数多くあって土蔵に関しては時間をかけ調査が必要との指摘もありました。

今後の課題

地震後一年以上が過ぎて復旧から復興へと市民が協力しあいながら頑張っていますが、いまだ仮設住宅に住んでいる家庭や、高齢化、後継者問題、資金の問題など復興までの道のりはまだまだ大変だと思います。

・がんばる輪島・を合い言葉に地元の建築士会として頑張っていきたい。最後に建築関連のボランティアで協力してくださった方々、行政機関の方々に感謝します。今後も復興した能登半島を目指して頑張りたいと思います。

派遣要請を受けた緊急時の技術指導についての雑感

独立行政法人土木研究所土砂管理研究グループ 地すべりチーム上席研究員 藤沢和範

能登半島地震発生後、派遣要請を受けて2回の現地調査を実施しました。1回目は、3月27日に富山空港へ移動して翌28日に輪島市町野町曾々木八世乃洞門、輪島市深見町の深見地すべり防止区域、輪島市門前町の鹿磯急傾斜地崩壊防止区域の3カ所を調査しました。2回目は、4月6日にヘリによる上空からの広域調査と、その後、輪島市門前町深見の急傾斜地、輪島市門前町深見の地すべり、輪島市大野町の地すべりの3カ所を現地調査しました。今でも印象に残っているのは、急峻な海岸線を走る国道に大きな岩塊が落下して八世乃洞門を破壊した厳しい現場の様子と地すべりによる土砂崩落の危険性から、市道を通行止めにした深見地すべりのことです。そのため、その後も4月21日、22日に調査及び応急対策等の進捗状況を確認しました。

八世乃洞門を被災させた岩盤崩落の発生源は直立した岩盤斜面であり、高いところでは比高差は100m程度あります。岩盤には多数の開口した節理面が見られることから今後も岩盤崩落が継続することが予想されました。景勝地でもあることから現道復旧の要望の強いことが予想されましたが、道路利用者の安全と岩盤崩落による災害発生時の道路管理者の責任を考えるとトンネルによって岩盤崩落の危険がある地域を避けるのが望ましいと感じました。道路の復旧方法等については専門委員会が設置され、土研からは別途、地質の専門家が委員として参加したため、私は経過確認のためにその後数回現地を訪問したのみです。しかし、本件のように岩盤崩落の危険がある道路斜面は全国に多数あるため、現在どのような調査・対策・監視等を行っているのか、さらには今後岩盤崩落が発生した場合には道路の復旧方策をどのように考えるのか、それぞれの斜面についてあらかじめ整理しておく必要があるように思います。

もう一つの事例は深見の地すべりです。この地すべりは海岸線を走る市道の斜面の上部で発生したもので、私は地震発生から10日以上経

過した4月6日に現地に向かいました。現地に至る市道には崩落した土砂や岩塊が手付かずの状態に残されており、地すべり発生場所のはるか遠方より通行止めになっていました。そのため林道を経由して現地に到着しましたが、現地を見たところ、斜面上部の尾根付近には落差10m程度の滑落崖が現れ、地すべりの末端と思われる斜面の中腹からは崩落した土塊が市道を乗り越え海まで達していました。斜面中腹からの小崩落の発生は市道からも時折確認され、また地すべり地内に立ち入って調査を行ったときの状況からも地すべりの動きが停止していないことを直感しました。そのため亀裂を挟んだ位置に地盤伸縮計の設置と、路面の土砂等を除去した後も市道の交通規制の継続を助言しました。4月21日に現地を再び訪れたときには、道路上の土砂は撤去され、土砂溜めポケットを確保した土堤が斜面直下に作られていました。これによって落石程度の小規模な崩壊には安全性を確保できたものの、それ以上の規模の崩落には対応できないこと及び計測結果から地すべりの動きが継続しているために交通規制は引き続き実施するように助言しました。この間には深見の集落の住民30世帯以上が長い避難生活を強いられていたため、通行止め解除の機運が高まりを見せた時期がありました。

私の助言に基づいて輪島市による通行止めが行われていたことから、その助言の内容に見直しを求める問い合わせが一時集中したことがありました。結果的には、市道が危険にさらされていることに変化がないことを繰り返し説明し、理解していただいて通行規制は継続することになりましたが、専門家の緊急時の技術指導のあり方・心構えについて改めて考える良い機会になりました。立場上、初めて目にする現場で、直ちに調査・計画の方向性や対策工の選定意見等を求められることも少なからずありますが、今回の経験を生かして今後も適切な助言が出来るように努力したいと思います。

能登半島地震後の緊急山地災害調査に参加して

独立行政法人森林総合研究所 水土保全研究領域治山研究室長 落合博貴

地震が発生した日、林野庁治山課山地災害対策室よりつくば市の自宅に連絡が入り、能登半島北部を中心に山地崩壊が発生しているとの情報があり、現地の体制が整い次第、災害の実態把握のため現地調査に入るよう要請された。翌日26日、林野庁と石川県、森林総合研究所の間で日程を調整し、27日朝の飛行機で林野庁山地災害対策室三谷課長補佐と伴に羽田から能登空港へ飛ぶことになった。事前の準備として林野庁より送られた資料とともに、所蔵の能登半島地質図に目を通した。

空港に着き、空港ビル内の奥能登農林総合事務所において、現地の状況について説明を受けた後、県農林水産部担当職員と伴に公用車に同乗して現地に向かった。初めに訪れたのは、門前町中野屋地区に発生した崩壊地で、麓を走る県道36号線からも南東向きの山腹急斜面に発生した崩壊跡が見えた。事前の情報ではここで土石流が発生したとのことであったが、人家脇を流れる溪流に設置した治山ダムで土砂が停止し下流への流出を防いでいた。溪流内には巨礫・流木とともに水気を含んだ土砂が厚く堆積しており、その少し上流の狭さく部では青味を帯びた土砂に削痕がついており、通常の豪雨時に発生する土石流とは異なる印象であった。我々は溪流脇の歩道を上がり、崩壊土砂と伴に発生した多数のスギ・ヒノキの倒木を潜り抜けて崩壊斜面を全貌できる箇所を探した。人の背丈よりも大きな巨礫の上に立つと、傾斜40度、幅約50メートル程の植生のはぎ取られた急な斜面が目前に広がっていた。崩壊地の中腹からは地下水が浸みだして下流に注いでいるものの、斜面の上部は比較的乾燥しているようであり、土石流の起源となるような多量の水流もなく奇妙に思った。その後、現場を下って麓のお宅で当日の様子を伺うと、崩壊発生後2日間にわたり溪流を移動する土砂により樹木が折れるバキバキという音が続いたとのことであり、土砂の移動速度がかなりゆっくりしたものであ

たことが伺われた。すなわち、通常の土石流のような水を多く含んだ土砂が急速に流下する現象ではなく、地震により崩壊した巨礫を含む土砂が水を含んだ溪流内をゆっくりと滑った現象であり、いわゆる高速で流下する通常の土石流ではないと判断した。

その後、尺が池地区、腰細地区の崩壊地を調査、翌日、輪島市街地へ向かい熊野町、袖ヶ浜地区を調査し、さらに猿山山地を走る佐比野林道の被災状況を調査して帰途についた。概況調査の印象では、同様な急崖を呈する斜面の崩壊が目についたため、特定の地質の場所に崩壊が多く発生したのではないかとの印象であった。そこで地質図と崩壊場所を詳細に比較するとともに、数回にわたり森林総合研究所のメンバーと現地調査を行った結果、能登半島の地質図における石英安山岩質凝灰岩層（K4）に相当する地層において地形が急崖を呈しており、そこに崩壊が多く発生したと推定された。崩壊箇所は、傾斜変換部（法肩）の凸地形の急斜面であり、いわゆる「地形効果」による地震動の増幅によって、平地に比べて地震力が働いたため崩壊したものと推定され、尺が池地区、熊野町地区、袖ヶ浜地区の崩壊もこれに類したメカニズムによる急崖の崩壊と考えられた。

また、当初土石流といわれた土砂の移動も、その後の現地調査により水を多く含んだ粘土層に崩壊した巨礫が急激に乗り上げたため、一時的に粘土の摩擦抵抗が小さくなって巨礫が溪流内を緩慢に滑って移動したものと判断した。こうした巨礫の移動現象は数少ないものの、地震とは無関係の別の落石現場における事例として報告されている。

最後に、今回の地震で発生した山地崩壊は、特定の地層に発生していることが特徴的であり、今後の地震時の対策のための材料となると考えられたため、林野庁を通じて行政部局に報告を行った。

能登半島地震から学んだこと

元能登北部医師会長 山岸 満

本年1月26日未明、突然の強い揺れが輪島市を襲った。震度5弱の地震、飛び起きた私は、テレビの臨時ニュースで被害のないことを知り安堵した。同時に、頭の中では昨年あの大地震の記憶が鮮明に蘇ってきていた。

昨年3月25日日曜、能登ゴルフ倶楽部で久しぶりのゴルフに熱中していた。午前9時42分、突然の足元の大きな揺れとそれに対応した松林の左右の往復運動。生まれてはじめて目にする異様な光景。数分後、私の携帯にもたらされた妻からの第一報。続いてテレビで映し出される門前の変わり果てた姿。言葉もなかった。

能登という過疎地に発生した大地震がもたらした未曾有の災厄。その中で体験で得たいいくつかの教訓を報告したい。

1. 震源地に近い私の診療所は家具などの被害は大きかったが、有床診療所としてのマニュアル通り、自宅の被災にもかかわらず職員が速やかに休日出勤してくれた。その結果、診療はできる状態になっており、当日12人の緊急患者を受け入れることができた。
2. 当日の夜から、翌日の朝にかけて、実に多くの医療チームが門前に入られた。この時点で災害避難者は約1,700人。多数の医療関係者、報道機関が集まったために駐車場は満杯となり、多少の混乱があった。県医師会から小森会長の全面的支援を取り付け、同時に避難所の医療救護班のリーダーは私が務めることに決定した。断続的に開かれた会議で今後の活動方針が速やかに決定したことで、混乱も最小限に留まった。
3. 3月27日より、本格的医療活動が開始された。避難住民に対する支援が多角的な視点で構築されたことは特筆に値する。「心のケアチーム」の参加。北陸各地から馳せ参じてくださった保健師、看護師の方の昼

夜を分かたぬ献身的介護。その活躍にはただ頭が下がった。医療チームによる身体管理と「心のケアチーム」による心のサポートが車の両輪のようにうまく噛み合っていた。このような体制が可能になったのも現地に張り付いて行政との連携を取っていただいた小森会長によるところが大きい。

4. 1日2回のミーティングには50人を超える方が参加し、それぞれの立場から貴重なご意見をいただいた。歯科医師会からは口腔管理、誤嚥防止、薬剤師医師会からは服薬管理、NPO法人の方から避難所におけるプライバシーの確保（女性の下着、トイレetc）、さらに栄養師会、リハビリ、柔道整復師会。また、不活発病防止、深部静脈血栓防止についても早期より取り組みが開始された。
5. 無論、すべてが上手く噛み合ったわけではない。ノロウイルスに対する感染防止はうまくいかず、感染症胃腸炎が一時的に増加する経過を辿った。ここでも医療班による感染対策、保健師、看護師による献身的活躍により一人の犠牲者も出すことなく、感染も終息に向かった。多くの善意と知恵と協力が如何に大切かを痛感した日々だった。

今、門前では倒壊した家の再建と共に、さまざまな町再生の取り組みが進んでいる。高齢者が多い地域のため仮設住宅から全ての人が解放されるにはもう少し、時間がかかるであろう。「心のケアハウス」は今も立派に住民をサポートし続けている。住民の笑顔が町に溢れる日もきっとそう遠くはない。一人の医師として、生まれ育てられたこの土地をこれからも守り続けていきたい。多くの皆様の御支援御協力に深謝いたします。

公立能登総合病院での地震体験記

公立能登総合病院 事業管理者 川口光平

忘れもしない、それは平成19年3月25日の朝であった。食事が終わって、机で自宅のコンピュータを操作していた時、突然揺れが来た。以前にも小さな揺れは経験していたので、すぐに収まるだろうと思っていたが、今回は違った。揺れは大きくなり恐怖を覚えた。とっさに女房を呼んで、机の下に避難した。数分して揺れが収まってから、温風ヒーター、ガスレンジ、給湯装置などを点検したが、温風ヒーターは自動消火になっていた。これは大地震だ。病院の損害は？との思いが沸き、不安そうな女房に落ち着いて行動するように諭し、車で病院に向かった。

午前10時過ぎに病院救急出入口に入ると、医師2人に会い、一応、病院内では患者に大きな損害はなさそうだと聞いた。地震発生が午前9時42分であったこともあり、休日ではあったが、回診に来ていた先生方が初期活動をしてきている状況であった。即座に災害対策本部の設置することに決した。災害対策本部の設置はこれまでにトリアージ訓練などを行っていた経験から、比較的スムーズに会議室に設置することが出来た。10時25分に災害対策本部の設置を宣言し、50人ほど集ったスタッフに被害状況の把握をするために20分間で各部署を回っていただくように指示した。被害のうち受水層の破損による水漏れ（水がなくなる可能性がある）、エレベーターの停止、検査室サーバーの故障、カルテ保管庫の故障が大きな問題であった。また、救急外来にも外傷患者が来ているとの情報もあった。この時点で最も大事な問題は、受水層の問題であったが、3分の1は貯められる程度の損害で、受水して屋上にくみ上げれば大丈夫と判明した。ついで、エレベーター停止状況で、患者の昼食をどのようにして運ぶのかであった。一応、人海戦術で運ぶことに決定して臨んだ。夜勤明けの看護師をはじめ、病院の危機的状況を察知してわざわざ出て来てく

れたスタッフが階段に並んで手渡しで食事を運ぶことが出来た。地震で自分の家が散らばっているにも関わらず、患者のため、病院のためにと集ってくれたスタッフは徐々に集り、約200人を超えていた。平成17年から病院経営改革に取り組んでいる途上での地震であったが、これだけ病院のことを思ってくれるスタッフがいれば、病院経営改革も出来ると確信させるだけの一致団結力であった。14時から再度の被害状況把握の作業を行い、15時には幹部4人で病院内を巡回し、明日の診療を行うかどうかを協議した。医療情報システムは異常なく、カルテ保管庫は修理に来てもらい、修理できない場合には、電子上の履歴でも診療できると判断して、翌3月26日は診察をすることに決定した。

幹部を残し、スタッフには関連部署の地震で散逸した物品を整理していただくこととし、これが終わったら帰っていただくようにした。災害対策本部には石川県医療対策課、警察、新聞社などからの被害状況、救急患者の問い合わせが頻繁にあり、対応したが、19時30分からは本部員2人が時間交代で対応することとした。救急患者の報告が主なものであったが、38人受診し、4人の入院であった。翌3月26日7時にはカルテ保管庫は全部復帰できたとの報告で、診察は可能の状況となり、平常どおりの診察にこぎつけることが出来た。

今回の体験から様々なことを学んだが、このような災害に対しては、日頃の訓練こそ適切な対応に導くものだと強く感じた。トリアージ訓練は毎年行ってきたが、この訓練から得たものは大きかったように感じている。また、職員の病院への熱い思いを感じた時、これこそ災害において最も大切なことではないかと感じた。職員が心から思いを寄せてくれる病院にしていくことが、このような危機的状況を救ってくれるものだと確信している。

能登半島地震における当院の対応

輪島市立輪島病院 病院長 品川 誠

地震の発生で、もっとも深刻な事態に陥ったのは透析治療を受けている患者さんです。当院の透析室はベッド数25床で78人の患者さんに治療を行っております。地震翌日、断水と給水の遅れで受水槽が枯渇状態となったため、透析1時間+ECUM 3時間に急遽変更となりましたが、このままでは患者さんの生命に危機が及ぶと判断し、石川県立中央病院への移送を決定いたしました。明日(地震の翌々日)の透析予定の患者さん30人の移送が決定し、急遽、午後に出発することになりました。しかし連絡が思うように進まず、昼頃になってやっと全員との連絡がとれました。また、患者さんのこれまでの診療情報を移送先の医療機関に提供するための作業も透析治療、電話連絡と平行して行われました。

移送については、自衛隊に対し当時輪島上空を巡回していた大型ヘリの使用を要請しましたが断られ、このためバスを使用することとなり患者さんは約4時間かけ石川県立中央病院に到着いたしました。能登有料道路が使用不能のため、地震で凸凹になった国道をバスで揺られながら、呼吸状態、全身状態の不良な方の看護をしつつ、全身の硬縮をきたし座位になれない方を抱きかかえての悪戦苦闘の道中でした。次の日には35人の患者さんを移送いたしました。透析患者を受け入れていただいた医療機関は入院8施設、外来通院1施設でした。

移送先の医療機関により必要とされるデータが異なり、78人の患者情報を短時間で作成することは極めて困難な状況にありました。災害時の必要情報の統一フォーマットを検討していただき、平時より情報出力できる状態に管理していくことが課題と考えます。

また、透析室と患者さんとのコミュニケーション不足も問題と考えております。地震当日、患者さんからの透析治療に支障がないかについての問い合わせは2件だけでした。また、透析スタッフから患者さんへの安否確認は行われませんでした。透析不能状態は患者さんの生命を脅かすものであり、相互の連絡体制の確立は急務と考えております。

能登半島地震に関連した熱傷や骨折以外に、地震発生後の2週間に7人の患者さんが脳心血管系イベントを発症しました。このうち2人が死亡されています。3人をヘリコプターで、2人

を救急車両で金沢市内または七尾市内の病院へ緊急搬送いたしました。

能登有料道路が閉鎖されており道路状態の悪い陸路での搬送には患者さんの安静が保てず、さらに通常以上の時間を要するため積極的に空路を利用する必要がありました。

地域医療に変革の波が押し寄せている昨今、当院だけでは地域医療を完結することはしばしば困難であり、中核都市の総合医療機関との密接な連携により適切な医療を提供することが必要と考えます。ヘリ搬送の円滑な利用には、迅速な連絡形態、情報交換が必要であり、県および関係機関と協議していきたいと思っております。

当院も約7割の職員が被災いたしました。聞き取り調査を行ったところ、頭痛、めまいを訴える職員は地震後一週間の時点で25%でしたが、半年後には数%に減少しておりました。しかし、不眠や不安感、落ち着かないなどの症状を認められた職員は直後には70%を超え、半年後も20数%に認められておりました。集中力低下による診療現場での不注意、うっかりミスによる医療事故の発生が憂慮されましたが、各部署でミーティングを行い互いに注意しあい緊張感をもって業務に臨みました。幸いに医療事故の発生はなく、地震後のヒヤリハット報告の増加も認められませんでした。

また、石川県看護協会のご支援により、3月27日(火)から4月13日(金)の間、交代で23人の災害支援ナースを派遣していただき、救急外来や中央処置室、各病棟業務に就いていただきました。おかげで、全壊など被災した看護師は交代で休むことができました。他の医療機関からの応援は精神的な支えにもなりました。

能登半島地震を経験して、ライフラインの確保がいかに重要かを再認識させられました。災害時にはマンパワーの確保が必要です。日頃から、自分たちが地域の医療を守るという強い信念を持ち、全職員が同じベクトルを持つことで、多くの職員が自主的に登院してくれました。しかし、先の見えない中、自分たちだけで乗り切ることには不可能であり、他の医療機関とのネットワークや支援の受け入れ態勢の構築など連携強化を日ごろから取り組む必要があると実感いたしました。

まだ見ぬ災害に備えて

金沢赤十字病院整形外科医 堀本孝士

能登半島地震の救護活動を行った経験から、初動対応及び災害応急対策についてどのような準備が必要か、思うことを述べたいと思います。

災害が発生したら『空振りを覚悟』で、できるだけ早く出動すること、とマニュアルには書いてあります。現場で使用する医療用物品の準備はあらかじめできているので、いかに早く派遣メンバーを集め、出発の命令が下るかが問題だと思われませんが、今回の初動対応はやや緩慢であったのではないかと考えられます。発災後、私は一度病院に行き病棟回診を行い帰宅しましたが、その後に病院から連絡が入り、召集されました。それから派遣命令が下り、現場に着いたのは、発災約6時間後でした。出来るだけ早期に医療活動を開始するため、また、赤十字病院という性格上どこよりも真っ先に現場に駆けつける必要があると思われましたが、すでに他の病院のチームが到着しており、医療活動が行われていました。幸い多数の重傷者がでるといった事も無く、ある意味では『空振り』に終わったのかも知れません。しかし、今後の教訓としてできるだけ機敏な初動対応がなされることを希望します。Pase-0（災害が起こってから系統的救出医療が開始されるまでの数時間）が限りなく短縮されることが最も重要だからです。

現場での救護活動を行う際、最も感じたのは情報の混乱です。特に発災当日は、道路状況や被害状況が全くといっていいほどわかりませんでした。現場でも混乱がみられ、医療チームが鉢合わせする場面もありました。情報を収集・分析し統一する機関の存在が必要だと思われま

した。2日目からはかなり情報の整理がなされていたようです。また、情報収集の手段として、携帯電話はつながらないことが多くあまり役立たないので、衛星電話が必携だと思われました。

現場での救護活動を行う際、必要な物品が足りないと感じました。被災者を診察する場所がないということです。今回のように建造物に比較的損傷が少ない場合は屋内で診察が可能ですが、仮設テントは必要だと思われました。患者のプライバシーを守る意味でも重要です。また、救護スタッフのための寝袋や毛布なども絶対に必要です。不眠不休で救護に当たるわけですから。

災害は、何の前ぶれもなく突然に起こるものです。そのため、日頃から、それに対応するための準備が必要です。初動対応についてのマニュアルの整備は最も重要です。また、災害の発生初期から経過をおって、必要な救護の内容が変化していきます。医療の面では、まずトリアージを行います。外科的治療から内科的治療、メンタルヘルスケアなど、さらには感染対策など衛生面での対応が必要となります。これらのことを詳しく学んでおく必要があります。

先日起こった中国四川省の巨大地震のケースを見ていると、遠くの出来事とはいえ、歯がゆく思われることがたびたびあります。もっと早く専門チームが派遣されていたらとか、二次災害を防ぐ方法が無かったかなど、改善されるべきことはたくさんあります。

明日、また、同様の災害がもっと近くで起こるかもしれません。少しでも被害が少なくすむように、今回のことを教訓として、勉強していきたいと思えます。

能登半島地震「救護班」ボランティア活動を体験して

珠洲市総合病院看護科看護師長 天満 富子

地震発生後、石川県看護協会・能登北部保健センターからボランティアの要請があり、第1陣として珠洲市は看護師長3人・技師1人と決定し、3月27日（地震発生後3日目）～3月29日までボランティア活動に参加しました。震災直後はとにかく被災者の不安が強いと思うので、少しでも体と心をケアしたいという気持ちと、近隣地域のことなので余震があり不安だけれど、行かなくてはという思いでした。

旧門前町役場まで約2時間弱の道のりでしたが、一瞬にしてすべてを失った家々や落石や道路の陥没・隆起があり大変なことになっていると思いました。私達は17避難所あるうちの仁岸地区の剣地公民館と国民宿舎つぎぢ荘の担当になりました。今まで大きな災害に逢う経験もなく過ごしているものにとって、災害看護支援機構の黒田裕子氏と山崎達枝氏との出会いは貴重なもので、情報収集・発信の方法や、支援活動の方法を学びました。健康相談票を元に情報収集し、バイタルサイン測定を行い被災者の方の健康調査を行いました。また衛生・防疫に関する感染症対策について避難所で生活を共にすることで援助していきました。夜中に余震があると赤ちゃんのようにくっ付いて来る高齢の女性や災害で日常生活が崩壊し、住み慣れた土地を離れる方のそばで横になり話を聞きました。

家庭訪問や安否確認は毎回同じ担当者が2人で行くように配慮しました。要援助者や慢性疾患患者の継続的援助の中で、一人が発熱状態となり入院されることになりました。レクレーションにお手玉を用いてお互いにキャッチしましたが、高齢の女性の表情が少しだけ和み、子供が声をあげて笑い、生き生きとした表情を見せてもらったことが救いでした。活動中に県の方の視察や石川県看護大学長さんの訪問は大変心強く感じたものでした。またボランティア開始前後のミーティングは一致団結して活動したいという現れのように思いました。活動期間中といっても災害発生直後から救援物資が届いている時期なので、その後は変化していくものと思いますが、人との出会いを大切に周りの方々に心の安定を図っていけたらよいと思いました。

その後、当院では災害看護チームを立ち上げ、マニュアルの見直しや取り組むべき課題であった組織的な動きについても検討され、災害に備えた訓練を行っています。あってはならないことですが、もしもの備えになるようにしていきたいと思います。そして今後の災害支援ナースの活動に活かしていきます。

災害に逢われました被災者の皆様の復興を心から祈っています。

能登半島地震体験記録

穴水町ボランティア連絡協議会長 松田 栄四郎

突然、震度6強という恐怖の地震を体験した。そのとき私は穴水町陸上競技場でグランドゴルフ大会に参加していた。参加者は160人程で高齢者が多かった。スタートして間もなくで大勢の方がグランドに座り込み、青ざめた顔で揺れが止まるのを待った。大会本部も被害が大きいと判断し、大会中止と至急帰宅するよう指示した。帰宅して驚いた。玄関の柱が傾き、戸は倒れ、ガラスが割れて散乱していた。足の踏み場もない状態であった。家の中は食器棚をはじめ棚や箆箆が倒壊しており、呆然と眺めるだけであった。そのとき、我が家どころではない、被害者の救済が私の責務であり、事の重大さを自覚した。家の中の通路だけを片づけ、社会福祉協議会へ駆けつけた。職員も民生委員を通して一人暮らしの安否確認に追われていた。早速、穴水町災害対策ボランティア現地本部の立ち上げの準備にかかった。災害の被害状況の把握に戸惑ったが、情報の収集と被害者のニーズを行政の町内放送で呼びかけ、情報収集に全力を挙げ取り組んだ。同時にボランティアグループに災害支援要請と召集を呼びかけた。被害を受けながらも大勢が集まってきた被害者のニーズに対応するための支援体制作りと現地救援派遣を実施した。ニーズによって行政とのパイプ役も重要な活動と判断し、要請の対応に努めた。避難所応援企画、避難所環境整備支援と戸惑いの連続であった。そこへ名古屋から神戸の阪神淡路大地震と新潟地震で救援活動を体験した「レスキューストックヤード」支援スタッフが泊り込みで指導にあたった。災害支援の手順などについてアドバイスを受けた。感謝している。町内外のボランティア支援団体が大勢駆けつけ、どうにか支援体制も整い始めた。被害者のニーズにマッチした効率的で被害者に満足感を与える支援体制作り努力した。地元の社会福祉協議会の職員をはじめ県内外の社会福祉協議会の職員も応援に駆けつけ、実に手際よく支援体制の先頭に立ち援助してくれた。感謝している。私は3カ所の避難所を巡回し、心のケアとニーズの収集に努めた。行政に対して被害者の要請に的確に答えているかもチェックしながら対応

に努力した。そのとき避難所の高齢者や子供達の心のケアが如何に重要であることを認識し、ボランティアの方々に協力を要請した。次第に避難所で不安な生活をしている方々にも笑顔が見られるようになり、ほっとした。慰問と励ましのボランティア活動計画も作成し、ボランティアの輪が大きくなるのが嬉しかった。皆さんの温かい支援に感謝した。5月に入り被害者は仮設住宅に45世帯が入ることになり、引っ越し作業の支援も行った。不自由な生活を余儀なくされている被害者の方々に対して、巡回ボランティアグループが心のケアに今も継続して頑張っている。優しい声かけ運動に加え、趣味を生かした作品作りなど仮設住宅の中央にある談話室に皆さんが集まって笑顔で出来ばえを話し合いながら和やかな雰囲気を作り出している。会話の中で再生復興に向けての話も交わされ、前向きに生きる努力と明るさがうかがえ、嬉しい思いである。日ごとに笑顔が増え、明るさを取り戻している。

災害者の再生復興に向けての要請は行政を交えて相談会を毎月、仮設住宅のケアハウスで実施している。色々なニーズに対応すべく行政にも要請している。

私自身も穴水町の再生復興委員となり行政、商工会の会議に出席し、積極的に被災者の要請に応えながら、再生と復興に向けて努力している。会議の内容も進行が早く、復興道路の測量に取り掛かっている。また町の活性化に繋げる復興に向けて、学識経験者の意見を交えて取り組んでいる。早期復興に期待している。

最後に私の能登半島地震から得た貴重な体験から、皆さんにお願いしたいことがある。それは、絆を大事に支えあって生きる大切さ、ボランティア活動とは、してあげるではなく寄り添う活動である。元気を与えて元気を貰う活動である。そして、能登半島地震のボランティア活動は終わったわけではない。形を変えながらゆっくりとニーズにあったものを探し出し、みんなで力を合わせて支援を続け、被災者が災害前の生活に少しでも近づける温かい支援が必要であるということに、ご理解をいただきたい。

能登半島地震体験記録

日本赤十字社石川県支部防災ボランティアリーダー 北村 裕一

地震発生時、私は日赤石川県支部内で40人の仲間と救急法の講習中でした。大きな長い揺れがおそってきたので、すぐに講習を中止し、テレビを見ると震源地は輪島市門前沖あたり震度6強とテロップに流れました。9時50分には自家用車で輪島方面に向かいました。途中、携帯電話は圏外で、情報はラジオに頼りましたが、能登有料道路は徳田大津で通行止めになっていました。そこからは国道を通過して穴水町に入りました。町全体が静まり返って車の台数も少なく、不安が増したまま輪島市に向かい、市内には11時30分頃に到着しました。

市内のスーパーの様子を確認すると陳列台から商品が落ちていましたが、比較的落ち着いた様子で店員の方が整理されていました。市内のお寺の倒壊が、地震被害の大きさを物語っていました。それから門前町に向かおうとしましたが、道路事情も含めて最悪の状態になると思ったため、輪島市に戻り、県の県民交流課と日赤石川県支部に被災状況を連絡し、輪島市役所で避難所の確認をし、日赤石川県支部に毛布と日用品セットの発注を依頼しました。毛布を2000枚、日用品セット300個を災害FAXで発注してもらい今日中に届ける確約をしました。その後、輪島市社会福祉協議会で現地災害ボランティアセンターを立ち上げる準備を、現地のボランティアと相談し、県の県民交流課と日赤石川県支部に連絡を行い、深夜、金沢に戻りました。

能登半島地震のマスコミの報道がすごいと知人や仲間から聞きました。そういう状態で2日目も現地に向かい、今度は七尾市、穴水町、旧中島町、志賀町、旧門前町、輪島市、能登町と被災地といわれているところをすべて回り、前日同様、県の県民交流課と日赤石川県支部に情報連絡を行い、現地災害ボランティアセンターの立ち上げのお手伝いをさせていただきました。2日目になると、県外のNPOの方もかなり現地入りされ、現地ボランティアセンターの早期立ち上げについて議論がおこなわれました。

3日目からは県災害対策ボランティア本部に協力するため県庁内で活動しました。県の防災

計画には、日赤のボランティアも本部に入る項目があり、普段から災害があったときはこう動こうという約束事をいろいろな方としていたので、自然にボランティア対策本部で活動できました。

しかし、最初は本部と現地本部との連携、マスコミ対応、本部内の連携など、いろんな問題点がありました。また、本部内は、ボランティアバスの利用者登録、災害状況確認、ボランティアのクレームなどいろいろな内容の電話があり、電話受けボランティアの方が対応できない内容は、なるべく私が対応しました。自分でも驚くくらい、その場で対応できたように思います。今までいろんな災害現場で災害ボランティアをしてきた経験が生きたようです。しかし、その半面、現地での情報交換会で門前、輪島、穴水へも行きましたが、地震発生後3週間ぐらいまでは自分も含めてみんなが、冷静な判断ができなかったのが原因で、意見のぶつかり合いも多くあり、反省ばかりの期間でした。その後は順調な流れになったように思います。石川県内のボランティア、県内企業の団体ボランティアも含め、今回の災害で、災害ボランティアに対する意識は間違いなく高くなったと確信しました。また、地震発生後3週間以降は、現地ボランティアセンターと被災者との信頼関係も生まれ、被災者ニーズも増え、県の災害対策ボランティア本部としても、現地に有効な支援が明確になっていたように思います。今回、私の反省点の一つとして、もっと大きい声であいさつができたのに、もっと大きい声でお礼が言いたかったのに満足なことができなかったということが、心残りです。

私は、日赤ボランティアとして募金活動にも参加しました。募金してくれる方の年齢は様々ですが、能登復興のために役立ててねと、募金箱にお金を入れていただいた時は本当にうれしかったです。能登井や映画の能登の花ヨメなどいろいろな面で能登の復興のPRがされていますが、自分ができる復興ボランティアは何かを考え、これからも活動していきたいと思います。

能登半島地震災害ボランティア活動体験について

石川県災害ボランティアコーディネーター協会事務局長 松井喜憲

私は、3月25日の能登半島地震発生当日、約20人を引率して、輪島市門前町の猿山（333m）に雪割草観賞ハイキングに行っておりましたが、門前深見集落の裏山で被災し、門前町・志賀町富来（特に笹波等海岸沿いの集落を通り）の被災状況を確認しながら一旦帰宅しました。

帰宅後、災害ボランティアコーディネーター協会（以後 協会）の会員に翌朝石川県庁に集合するよう召集をかけ、発災翌日の3月26日に災害ボランティア県本部（以後県本部）に入りその後、石川県職員と一緒に穴水町・輪島市等の市町の災害対策本部を訪問し、災害ボランティアセンター現地本部（以後VC）開設の働きかけを行いました。また、同時に県災害対策ボランティア本部の体制とシャトルバス運行の原案を立案しました。

（事後の反省ですが、コーディネーター協会は発災翌日朝に被災地の現地災害対策本部（以後 現地災対）に入ったのですが、この時期は現地の社協が最も混乱している時期であり、発災から1～2週間は、続けて社協側のスタッフとして現地災対との調整や、全国から来たボランティア・NPOとの応対を肩代わりすれば、もう少し現地社協の負担が軽減できたと思います）

その後の3日間で、3カ所のVCの状況を把握し、31日から最も被害規模の大きい門前VCに入りました。

我々は仕事を持ったボランティアですので、VCに毎日入る事ができず、4月は週に1日有給休暇を取り、5月は連休の全日と2週間に1日の有給休暇を取り、2カ月間のVC開設中に延べ1カ月間VCに入りました。

しかし、ボランティアの任意性という弱点から、継続的にスタッフを派遣する事ができず、VC内の機能を分担する事ができないために、VC組織の中核には入らずに、活動として、気が付いた点をアドバイスさせて頂いたり、スポットで渉外や現地下見などのお手伝いをさせて頂きました。

また、現地にいた時に、多くのボランティア

が集落の災害ごみ置き場で、ごみを分別している所へ、被災したお年寄りが1人でシルバーカーに小さい家具を積んで捨てに来る姿を何度も見て、思わずボランティアを出すから何人でも頼んで下さいと伝える日々が続きました。VCの役割として、被災者のお年寄りが、ボランティアに頼もうかという気持ちになってもらうことが大切であると痛感させられました。

2カ月目に入るとボランティアが少なくなり、私も含めてVCスタッフ自身が作業に出るケースが多くなりました。2カ月スパンでのニーズの予測とボランティアの確保の重要性を痛感しました。

また、この時期に、県内の高校が平日に生徒をボランティアに出して頂いた事は本当にありがたく思いましたし、被災した老人の方も県内の高校の名前は知っているので安心して受け入れて頂けたようです。

VCの2ヶ月間で感じたことは、太平洋側の大都市の災害と日本海側の小さな市町の災害には規模の大小の差の他に様々な差があるという事です。災害に手馴れたNPOの他に、多少、ノウハウを持った県内のボランティアを入れ、地元とのバランスを取った復旧支援をすることが大切であると思いました。

振り返ると自分自身と協会の無力さを感じながらの2ヶ月間でしたが、今後は大きく分けて次の点を検証し活動して行きたいと思います。

- ・日頃からいろいろな機会ですら防災意識の啓蒙を図る。
- ・防災訓練へ積極的に参加し、地元社協や市町等との連携を図る。
- ・県の災害ボランティア本部とボランティア現地本部の円滑な運営を図る。
- ・近隣の県で災害発生時にボランティアとして災害支援を行う。ことなどです。

最後になりましたが能登半島地震後、引き続き地元を毎月訪問しており、仮設住宅が完全に撤去されるまでは、この活動を続けようと思っております。

「人」

災害ボランティアコーディネーター 伊藤 静香

研修を受けてから約2年経ちますが、県内の地震で実務活動をするとは予想もしていませんでした。災害ボランティアコーディネーターが活躍するような災害がなければいいと思っていました。災害経験のない私にとって「能登半島地震」では全てが初めての活動でした。都合により多くの活動は出来ませんでした。多くの貴重な経験ができました。

復旧復興には必要不可欠なものはいくつかありますが、一番大切なのは人だと思います。被災地域の人・活動ボランティアなど多くの人と出会い活動する中で、人とのつながりやコミュニケーションの大切さを切実に感じました。

短い時間でコミュニケーションを取り、信頼度を上げ、事務的に処理していくのではなく、目に見えないものを大切にしていく。日々の日常生活でも同じ事が言えますが、非日常時では益々大切にしなければならない1つであることが分かりました。

被災地のために人と人をコーディネートしていくボランティアリーダーには、ニーズ依頼者や活動ボランティアに素早く安心感を与えるこ

とも大きな役割だと思います。

例えば活動紹介班での出来事です。

活動紹介に集ったボランティアへ注意事項などを伝えるオリエンテーションで、リーダーがズボンのポケットに手を入れて話をしている姿を見て、私は急に不安になりました。誰もが多かれ少なかれ、不安感や緊張感がある中、ちょっとした言葉や行動で揺らぐ事があることが分かりました。言葉を通じてコミュニケーションから安心感へと繋げることでお互いにいい活動ができると思います。

県内外問わず全国から復旧復興を願い被災地へ多くの人が集まりました。

人からも天災からも学び、知識と経験を積み重ね、自信を持って活動できるようになりたいです。自分が思うように十分な活動ができなかった分、全国の皆様に助けていただけたと思っています。コミュニケーション上手になり、もっとスキルアップをしていつか恩返しをしたいです。

全国の皆様の善意に感謝をいたします。

「能登半島地震ボランティアに参加して」

石川県立羽咋高等学校2年 山田 亮

地震が起きて、輪島や門前ばかりがテレビに映り、あまり災害の実感がわきませんでした。しかし、ゴミ処理場のゴミの多さを見て、思っていた以上の被害にとっても驚きました。

ゴミの分別をしていると、まだ見えそうで新しい物がたくさんありました。大切な物が壊れて捨てざるをえなくなった方々はたくさんいると思います。一瞬にして大切な物や建物を失う辛さは、体験してみないとわからないと思います。ボランティアはそのような人々の負担を少しでも減らすことができる良い機会だと思いました。

ボランティアをする機会はあまりありません。私も今回で2、3回目ぐらいです。野球部

で行ったときには、被災地の家々を訪ねて、お手伝いをさせてもらいました。私は被災者の方々は明るさがないものだと思っていました。しかし、実際はとても明るく接していただき、たくさんの「ありがとう」の声をもらいました。私はここにボランティアの最も良い部分があるのだと思いました。

被災者に対して、ボランティアをしてやるという上からの目線ではなく、常に被災者と同じ気持ちでいることが大切であると学びました。自分の為でもあるが、やはり被災者の為にやっているのです。今回のボランティアは、全員参加でしたが将来は、人に言われてではなく、自分で積極的に参加したいと思います。

緊急時の体験から見たもの

輪島市門前町道下区長 泉 靖郎

1. 自分の被災体験＝大地震の怖さ

25日朝9時42分、地震が発生した時、私は裏の庭に面した縁の廊下にいました。

ドーンという地響きの直後、激しい上下の揺れに立ってられない状態でした。家中が激しく震動する音とともに、瞬間に戸が倒れ、壁が落ち、家具や戸棚が倒れ、物が散乱しました。すぐに外へ逃げなければと、98歳の母がいる居間を見ると、テレビが台から落ち、サイドボードが倒れ足の踏み場がない有様でしたが、幸い部屋の中央のこたつで無事でした。すぐ母を背負って、戸の外れた縁から裸足のまま、裏の庭へ出ました。家は倒壊を免れたものの、体験したことのない衝撃で気が動転していました。

9時43分、防災無線で津波注意報の発令で、「この放送で避難所に地区民が集合する」ことを思い、母を軽トラに乗せて地区の高台にある指定避難所の「道下農村公園」へ急行しました。

2. 生かされた防災訓練

道下区は258世帯、約600人、9町会があります。

区長として最初にしたことは、避難者の掌握でした。5か月前に偶然にも、能登半島地震とほぼ同様の地震を想定した輪島市防災総合訓練の体験を生かし、町会長に町会名を書いたプラカードを渡し町内ごとに集合し、避難状況の掌握をしてもらいました。どの町内にも避難していない人があることが分かり、消防団員や町会長に避難を呼び掛けるための見回りをお願いしました。

11時30分の津波注意報解除までの、長時間の外での待機は、高齢者、病弱者にとっては厳しい状況でした。椅子を用意する。ブルーシートを敷き、毛布（公民館のもの）で休めるようにする。これらの準備は避難所に集まった人たちの自発的な行動で進められました。

3. 避難所生活を支えたもの

津波注意報が解除されてから、諸岡公民館に移動。地震当日は公民館3室計166畳とロビーに247人を、入りきれない幼児連れ世帯と約60人を松風台保育所に収容しました。25日は道下区の半数が泊まりました。

①避難所としての公民館

避難者でもある、区長、公民館長、主事、地元の市職員が事務所に詰め、避難者の世話を相談しな

がら進めました。昼食の準備、応急トイレづくり、水タンクの設置など、市の支援体制が整うまで、地区の自分たちでできる対策をとりました。

また、避難所としての機能だけでなく、地区の被災者からの問い合わせ、復旧情報収集提供など情報伝達の窓口として活躍し、ボランティア依頼の受付も行われました。

②町会長の協力

避難者の状況を掌握、市からの情報連絡、在宅要援護者の点検など町会長の協力なしにはできませんでした。特に膨大な量の災害ゴミの処理について、いつ、どこへ、どのように出すか、その指示の徹底が大変でした。

③地域団体の行動力

消防団＝地域を巡回し安全確認と避難の呼びかけ。被災宅屋根へのシートかけ。

婦人会＝昼食時を控え、公民館に避難した人たちへの炊き出し。

地元建設業、左官、大工職人＝応急トイレの設置

④民生委員の活躍

地区民生委員の「要援護者見守りマップ」の情報をもとに見回りし、要援護者の安否確認が素早く行なわれた。

⑤ありがたかった支援

日本赤十字社から毛布、日用品、食料などの救援物資は助かりました。また当日夕方には石川県日赤救護班の保健師、介護師が到着し、さっそく避難者のお世話を24時間態勢でして下さいました。5月1日の閉鎖前日まで常駐していただき、その親切で献身的なお世話にとっても感謝しています。また全国から駆け付けた、たくさんの方々に助けられ、元気づけられました。

4. 復旧・復興に向けて

地区住家の被害は大きく258戸の内、160戸が全半壊で、無被害がわずか2戸でした。被災から1年を経て、住家の復旧は驚くほど速く進んでいます。住みなれた土地を離れたくない気持ちを、行政からの支援金、義援金が後押しをしてくれました。また、復興基金による支援事業の「住まい・まちづくり協議会」を組織し、復旧にとどまらず、新しいまちづくりへプランづくりを進めています。

能登半島地震は、地区民にとって、強烈で、学ぶことの多かった被災体験でした。

「がんばる米」に笑顔をのせて

農事組合法人モロオカエーシー代表理事 竹内新一

地震が起こった3月25日は日曜日で、私は農作業を休んで何処かへ遊びに行こうと思い、着替えの最中でした。一発目、上空からジェット機の衝撃音が頭の上から落ちてきたと思ったら、次は下から突き上げられ、物凄い地鳴りと共に左右に揺さぶられ、家財道具やテレビ、冷蔵庫などが次々と倒れてくるので、どこに身を置けば安全なのかさっぱりわからない状況でした。そのうち、揺れがおさまったので、すぐに外へ飛び出しました。近所の人達も顔色を変えて集まり、何が起こったのかわからずパニック状態でした。幸いにも私の家の周りは倒壊した家はなかったので、その時はすごい地震とは思いませんでした。

少し経ってから、防災無線ですぐに高台へ避難するように告げられました。近所の人達と高台へ登ると、町内のみんなも続々と集まって来ました。高台から海の方を見ると、海水が濁り、今にも何かが起きるような感じの光景でした。

次に町内の方に目を向けるとあちこちの家、納屋等が倒壊し、凄まじい光景が目飛び込んできました。私達の農業法人が所有する農機具格納庫の方向は、すべての建物が倒れているように見えました。私は一瞬、農機具がすべて壊れてしまったと思い心配になりましたが、皆が集まっている所へ行き、町内ごとに全員無事にいるか点呼を取った後、公民館へ避難しました。

その時は仕事のことなどは頭にも浮かばず、みんなと一緒にボランティア活動を行い、一週間が経ったころ、少し落ち着きが出てきました。私は仕事のことが気になり始め、農機具格納庫を見に行くことにしました。半分諦めていた格納庫が無事で、農機具も何とか無事だったので、「今年も仕事ができる」と思うと何だか胸が熱くなってきました。ひと安心して家の後片付けを行った後、仕事に取りかかろうとハウスへ水稻の苗づくりの準備に行くと、水稻用の育苗床土が見るも無惨に散乱しており、後片付けに2、3日かかりました。

仕事の傍ら、公民館で朝晩ボランティアを行っていた時、家を失って公民館に避難している高齢者の人達から、「今年は田んぼも畑も出来ない」との話の聞きました。私は「田畑が荒れてしまえば、地域の活力が消えてしまうのではないか」と心配になり、田んぼ作りを諦めている農家を訪ね、「今年一年だけでも私が田んぼの作業をする

から任せてくれ」と言いながら個々の農家を回りました。農家のみんなは心よく私に任せるといい、喜んで預けてくれました。

平年より2週間遅れて田植えの準備にかかりました。しかし、水田へ行ってみると見た目は何でもないように見える水田が、トラクターで耕して初めて、いたる所に土が隆起していることが分かりました。中山間地の棚田では、畦畔が崩れ、水稻を作付けできない水田も2、3カ所あり、用水路も崩れたり、裂けたりしていました。私は、このような状況ではかなりの水田を休耕しなければならないと思いながら、一応、水田だけは耕起しておこうと作業していると、水利組合長が訪ねて来て、「用水路の修復を早急にするから、出来るだけ水稻を作ってくれ」と言われ、「そこまですぐに対応してくれるなら、私に任せなさい」と笑いながら返事をしました。

しかし、水田を均平にするのにかなりの時間がかかり、約10日遅れて田植えを始めました。6月中旬頃までに終われば良いかなと思いながら作業しました。しかし、仲間の応援もあり、思ったより早く終えることができました。仲間には感謝の一言です。

私の田植えも一段落し、町内を回ると6割の家が取り壊されていました。改めて、地震の凄さに恐怖心が湧いて来ました。私と出会う町内の人達の口癖は、「よう頑張ったね。秋が楽しみだね」でした。この言葉に励まされながら作業し、収穫期を迎えました。私は収穫した米を、仲間と地震を乗り越えて頑張ったのだから、自分達にすこし褒美を貰うために「能登がんばる米」とネーミングして販売しようと進めました。

いつの間にか町内のみんなにもこのネーミングを覚えてもらい嬉しくなりました。私は地震で水田を作れなかった農家や以前から水田を預かっていた農家へ「がんばる米」を持って行くと、「あんたが頑張ったのだからこの米は貰えない。」「水田を荒らさないで作ってもらっているからこの米は貰えない」「がんばる米を貰って頑張る」などの言葉を頂きました。

今回の地震で感じたことは、地域の人達の団結力の強さ、思いやりで、これにはつくづく感謝しました。その一方で「音に対する恐怖心」が心に焼き付いて残っています。地震は本当に怖いものです。

素早い決断で、溜池の決壊を回避

志賀町笹波区長 茶畑勝朗

震源に近い石川県羽咋郡志賀町笹波地内でも震度6弱を記録し、地域の農業用水として利用している溜池（平田上池）は25日の地震で堤防の一部が壊れ、大変危険な状態となり、決壊すれば真下にある（平田下池）も決壊し、下流の人家にも被害を及ぼす恐れがあった。（当時春の農繁期前で上池、下池共に満水）翌朝の余震で平田上池は決壊したが、早い決断で下池の水位を下げていた為か、下池の決壊を未然に防ぐ事が出来た。

3月25日地震発生後、区長は区内を一巡し区内の役員に各班の被害確認を指示し、被害状況を受けるなか、溜池管理人より平田上池の情報を聴き管理人と溜池の確認にいった。平田上池は3分の2程裏法面が崩壊していた。この時点で下池の水位を下げる為に取水栓を1本だけ引き上げ、志賀町役場富来支所及び本所に通報するが電話、携帯電話も思う様に役にたたず、どうか被害状況を報告し本所、支所の職員が来た時点では法面の中央では抜水が少し始まりかけていたのを（本震以後数回余震もあり）目視出来たので、職員との相談の後、下池の取水栓を新たに1本引き上げた。2本の取水栓を同時に引き上げることは未だに経験の無いことであり、排水路下流の民家に状況説明する事にした。

この時までは決壊の恐れについては本当の話をして回り、避難したほうが安全の旨伝えた。当日の避難者は住宅被害や溜池に関連した者で50人強であった。25日は日没近くまで監視し、区長、堤管理者とも避難所で朝を迎え、早朝の監視時7時頃の余震時に決壊が始まり、其の時の下池の水位は前日の2本の取水栓引き上げの効果もあり、7時の決壊時には急激な増水にはならないが、赤茶けた水が満杯になり、下池の洪水吐から流出し始めてから、上池も確認しながら下池の取水栓を戻し町職員との今後について協議に入った。その時、避難所当直の方だろうか、同行された町職員の方も確認され、本所に通報した。

この後、下池の水で五月の田植えを済ませ、秋の収穫までの間、2人の水管理とし、水路の水を耕作者には一切取り扱い厳禁として管理し、通常の収穫をさせて頂いた。

平田池の本格的な復旧工事は9月以降となるため、管理者には長期にわたり気苦労をかけた。この件につき以前から笹波区には、区長、副区長、会計、班長×8人、副班長×8人、堤管理×2人、水当て×2人の体制が出来ていたことが幸いした。その他に各役職、各種団体もあり、区民の協力の上で20年度を迎える事が出来た。

災害時、外国籍住民は誰に頼れるの？

輪島工房長屋 七浦 禎蓮

2007年3月25日の朝、突然来た揺れ、電気や電話が動かない状況で、これほどの揺れを経験した事が無い私には大地震と気付くのに時間がかかりました。当時、勤務中だった私は、上司の指示で家族の安否を確認し、その後、家族と合流することができました。今だから穏やかに語れますが、当時のパニック状態は、映画のようでした。

余震が続く中、輪島市役所の災害対策本部の町内放送を聴いたり、周りの日本人の話を聞いたり、地震後に備えました。例えば、ライフラインの確保—浴槽に水を溜める、電池や懐中電灯、蠟燭を用意する、おにぎりやパン、ミネラルウォーターを購入するなどです。主人は倒れてくる物で二次災害が起きないように、棚を壁に固定したり、逃げ道を作っておくなどの対策を取っていました。

今考えれば、私の国籍は中国(台湾)ですが来日して13年。日本語検定1級合格者で、日本人の家族も居るので、災害に対する受け方や対処は日本人と差ほど変わらない気がします。外国籍住民の中でも私の場合は災害時、自分の家族や同僚に頼ることができました。しかし、日本語が流暢に使えない外国籍住民はどうでしょう？地震の二日後、私は通訳として最も被災が深刻な門前の避難所に居る外国籍研修生を尋ねました。彼女たちはその時点で未だ地震の状況を把握できず、市や政府からの支援を受けられる事も理解できないまま、怯えていました。避難所では外国人向けの説明や指導者もいない状態で、言葉が通じないから外国人側の問題点も収集できず、輪島市災害対策本部へ返された報告は、外国人被災者は特に問題はないとの結論

になりました。

日本語が流暢に使えない外国籍住民は災害時に、誰に頼ればいいのでしょうか？会社ですか、役所ですか、近隣ですか？それとも自分たち？

過疎地だから、外国人向けの取り組みが鈍いと考える人はたくさん居るかもしれません。でも、過疎地だから日本語があまり分からない外国人が来るのです。例えば農家のお嫁さん、技術実習研修生。このような外国人はほとんど他人と接触がないまま日本で生活しています。普段は静かに暮らしている人たちこそ、災害時に忘れられてしまいます。できれば、普段の生活から彼らのケアを市町で担っていただけたら、災害時も同様に対処できるのではないかと思います。

外国籍住民も同じ住民なので、同様な待遇を受けられれば、災害時に抱える不安も減るでしょう。二次災害を受ける事も減ると考えます。

地震から一年経った今、私たち家族はやっと通常の生活に戻り、狭いアパートから逃げ出し、畑や田んぼ、竹林に囲まれた家に引っ越しました。家では賞味期限の長い非常食、ミネラルウォーター、電池式懐中電灯がありますが、夜中に来る震度3の地震で目が覚める事は、今でも変わりません。でも、能登半島地震のおかげで、私たち家族は輪島をもっと愛せるようになりました。私たち家族は一つなんだと知らされたからです。

この過疎地で日本人のような外国籍の私は、これからも他の外国籍住民の助けが必要な時に、力を貸したいと思います。日本人からの助けも大事ですが、外国籍の住民間で頼れる人になれたらもっと意味があると思います。

能登半島地震の体験から

七尾市中島町 永谷 誠行

石川県議会議員選挙が近づき、地元から議員候補者が出馬を予定していたので、能登島の知人宅へ向かっている途中、車中で大きな大きなゆれが、今迄経験したことのない揺れが襲ってきました。携帯を掛けたが繋がらず、取り急ぎ選挙事務所へ帰り、この日はこれで上がらせて欲しいとお許しを得て、店へ急ぎました。

能登島で感じた揺れが尋常でないことはわかっていたのですが、店に足を踏み入れてびっくりしました。陳列台が倒れ、棚の上から酒類のビンが落ち、店中にアルコールの臭いが充満しておりました。後から聞いたことですが、アルバイトの短大生が片付けをするうち、臭いで酔って途中で上がるようになったそうです。

市役所中島支所より町会長は集合する様にと連絡が入っていて、駆けつけました。すると在所の現状を把握し、連絡するよう指示がありました。集会所に役員、班長に集合してもらい、六班に分かれて現状を把握してもらいました。

◎人的被害なし

◎水道本管三カ所破裂

と第一報を支所へ報告しました。水道管の破裂三カ所共、当日中に応急処置ではあるが、破裂箇所が多く有る中、復旧することが出来ました。役所、業者の方達に感謝しています。

在所全体を改めて自分自身で確かめたくて巡回しました。お宮さんの本殿に揺れ有り、鳥居、燈炉、狛犬が破損、同じ境内に有る中島地区の忠魂碑も崩れ落ちている。向かいに有るお寺さんの墓地で八割以上の墓が倒壊。住宅、蔵、納屋等何カ所も被害あり、道路の浮上箇所有り、当日は気付きませんでした。熊木川の石垣が落下、市道岡林道が通行不能、堤の土手が水漏れ等、段々被害が拡大していくようでした。

市指定の避難所へ移動した世帯、一世帯、自宅を離れ移動した世帯、一世帯、納屋へ移動した世帯、一世帯でした。何はともあれ人的被害のなかった事に胸を撫で下ろしました。

一段落して自宅へ行ってみると、玄関の下駄箱（二段になっている背の高いもの）が倒れ、上り口を塞いでいます、台所の天井が落ちています。トイレ、廊下の壁が損傷、二階へ上がって自分の寝室へ入ってまた驚きました。いつも

寝ている真上から、タンスが扉を開いた状態で落下していました。もし寝ていた時間だったら、怪我はおろか死んでしまったかもしれない状態です。今こうして自分が元気で有る事に、神、仏に感謝しながら、頑張らなければいけないと心から思います。

大工さんに家の修理をお願いしました。訪ねて来て下さったのですが、玄関におはようございますの声はしたのですが、時間が経っても入って来ません。上がってお茶でも飲みながら話しませんかと言うと、あなた方は気の強い方達や、俺はこんな恐ろしい家へ上がれんと外での立話になってしまいました。直せと云えば直すが、下からやるのと変らんほどの金額になるぞ、そして真面にならないと説明されました。修理で済みますか、建て直すか、家族で相談しましたが、妻や子供達は新築を希望します。しかし母は長年の愛着と、夫と二人で苦勞して改築した時の想いから、出来れば残したいと言います。長い時間を掛けて母を説得し納得した様であっても、お友達、御近所の方達からあんな立派な家を、もったいないと言われれば、また気持ちも揺れて、どうしても壊さなければならぬのかと迷います。補助対象期間ぎりぎり迄時間を掛け、11月末にようやく母に諦めてもらって取り壊すことにしました。

お宮さんの境内の整理を4月25日の春祭りまでに完了したくて、鳥居等石関係を作って下さった業者さんをお願いしたが、込み合っていて間に合わないと云われ、ある会で知り合った業者さんをお願いすると、自分達で作った所も何カ所も引き受けていて間に合わない、加賀方面の友達の同業者に来てもらうことで何とか間に合わせてもらいました。本当にありがたかったです。

この地震のお陰でいろんな事を学ばせてもらった様な気がします。普段持っていた、行政に対する考え方が変わるくらい、皆、頑張っておりました。今も仮設に住まわせてもらっているのですが、いろんな方達の御支援を頂き勇氣と元気を貰いました。この頂いた御恩を私達家族は、石に刻んだ様にいつまでも忘れる事なく、お返し出来る様になりたいと願うものです。

震災からの一年一日記・メモからー

輪島市門前町深見区長 板谷 弘

- 3月25日 雪割草祭で猿山散策来訪者が一年で最も多くなる。朝8時登山口の受け付けを開始。9時40分ごろ、突き上げるような激震あり。深見住民は築港の広場へ避難。年配者の「津波が来る」という声で高台へ移動。携帯電話の情報で津波の心配がないことを知る。他地区へ通じる道路は土砂崩れのため通行不能。深見は孤立状態。住民脱出の手段として隣集落の漁業会社へ漁船(約5トン)による脱出運航を交渉し承諾を得る。人数確認の上漁船で殆どの住民が門前西小学校へ避難。深見に9人留まる。
- 3月26日 集落の裏山(南側北側共)に地震による亀裂を発見。降水による土砂災害防止のためブルーシートを張る。
- 3月27日 集落内は危険につき全員退去を役所から勧告される。滞留を断念する。
- 3月28日 全員阿岸公民館避難場所へ移る。
- 4月1日 パトカー先導で消防隊50人が深見地区へ入り住宅の屋根補修。
- 4月4日 御供田幸子一座の慰問公演あり。全員笑いと涙の熱演ショーに歓喜感涙。
- 4月9日 今日から日中時間制限で深見地区へ住民が入り片付け作業する許可が出る。
- 4月18日 市土木課より深見地区の復旧は今年一杯かかるとの説明あり。
- 4月24日 昨日と今日市土木課、県議と深見海岸道路復旧について話し合う。
- 4月27日 杳掛元大臣が阿岸公民館を視察。
- 4月29日 4月9日以来ほぼ連日ボランティアの方が深見へ入る。本日は20人入る。
- 4月30日 深見全員阿岸公民館から道下仮設住宅へ移る。赤石公民館長へ深見一同謝意を表す。深見全戸が仮設住宅の一区画に居住。仮設150戸の区長を依頼される。
- 5月17日 歌手の北島三郎道下仮設住宅を慰問。その外多数の慰問を土日を中心に受ける。今後も慰問予定、慰問物資共に多い。
- 5月29日 集会所で深見地区の臨時集会を開く。議件は両裏山地滑り防止工事、岩のり畑の復旧工事、海岸道路復旧工事、サビヤ林道復旧工事、お滝神社の修復工事など。
- 6月5日 市職員と共に海岸土砂崩れ箇所の崩落状況を現地確認。該当地権者を調べる。
- 6月20日 深見地区31人が県議会傍聴。その後県庁見学。知事室で知事さんと震災について懇談。知事さんから大変有意義なお話あり。深見地区一同知事さんのお心遣いに感謝。皆で金沢まで行った甲斐あり。
- 6月26日 深見で新たに土砂崩れ発生。明日は通行止めの通知あり。
- 7月12日 深見両裏山の工事に10社以上の業者が入り工事を急ぐとの情報あり。
- 7月23日 道下仮設住宅へ冬柴国交大臣、谷本知事他の一行が視察。大臣から深見住民の帰村について心強い言葉を頂いた。
- 8月17日 深見の坂下初江さん(70才)逝去。仮設住宅区長を引き受けて以来入所者の健康を気に掛けてきた。阪神大震災では仮設入居高齢者が多く亡くなったと聞く。坂下さんの死は深見の大事な人を喪っただけでなく色々な意味で残念である。
- 9月1日 昨日の土砂崩れで海岸道路は明後日まで通行止め。
- 9月26日 知事さんより深見の帰村が予定より早くなる可能性の吉報あり。
- 11月21日 仮設集会所へ梶市長、宮下県議が来訪。深見帰村の話あり。嬉しさのあまり夜は独杯を重ねる。
- 11月25日 深見帰村の引っ越し始まる。
- 12月10日 山崎道下仮設住宅新区長に事務引き継ぎして深見の自宅へ引っ越し。
- 1月8日 深見地区総会。総会后御供田幸子一座と阿岸公民館長を招待してビューサンセットで深見地区新年会を催す。
- 5月20日 深見川河川及び道路工事続行中。

能登半島地震に想う事

志賀町鶴野屋 松田 外茂三

当日、朝食後、私たち夫妻で不幸のあった親戚へ挨拶に行こうと思い私の家の下にある稗造研修センター駐車場で車のエンジンをかけ、家内が下りてくるのを待つため、車から降りて家の方を振り向いた途端、いきなり地面が揺れだし、私はその場で何をすることも出来ず、又何が起きたのかと考えることが出来ないまま突っ立ったままでした。

しばらくの間ですが、目の前の視界から周囲の建物が消えてしまった様に思われました。

震動がおさまった瞬間、近所の人々が大声を上げて集まってきました。二階に座り込んだ人、柱にしがみついた人、物に挟まれて動けなかった人、色々と集まってきた人の話が入り混じっていました。

特に私の孫の男の子がドアが開かなくなり、部屋に閉じ込められ、それでも外に出たい一心で、窓を開けて外へ飛び出して来ました。

また、私の息子が職場の都合でタイに行っていたのが偶然昨日休暇を取り帰国していました。昨夜は私の住まいの方で久しぶりに夜遅くまでお酒を酌み交わし、当日は朝寝坊をして建物の中に居たのでした。

それでも、我々の地区は、ケガをする人も無く、幸いなことに家の倒壊が無かったことが不幸中の幸いだった様に思われます。この地区は50歳前の若者がほとんど居ません。中学生、高校生が5人程です。後は殆どが老人会に加入している年齢の者たちです。

私たちが、子供の頃から、先人に「この地区では地震など絶対に起きない」と聞かされていたものです。地震に対する備えなどあるはずがありません。自然の怖さをつくづくと思い知らされ、現代の人間に驕れる心を戒めてくれたように、自分なりに判断しました。

誰も恨むことの出来ない大自然の怖さから、人間の弱さが情けなく思っています。

その上で感じたことは、町政のあり方に一時は不平不満が多少心にありました。火事が起きた訳でもなく、当事者がただ「対応が遅い」と言っているだけで、何をどうして欲しいのかもわかりません。「溺れる者、わらをも掴む」と

いう言葉があるように、一抹の寂しさと不安が頭の中に生じてきました。

何はともあれ、当地区の避難所である旧稗造小学校の体育館は屋根の瓦が落ち、天井も落下して中に入ることができず、急きょ隣接する研修センターでの自主避難生活が始まりました。

当然、集団生活経験の無い人々の生活で、精神的にも肉体的にもうまく行くはずはありません。女性陣が食事の仕度をし、男性陣は日中、家の復旧作業とがんばっている人もいました。

避難所では県や町の保健師さんや医師が時折来られ、私たちの健康面に気を配っていただいたことが何よりも嬉しく思いました。

一緒に生活をしている人々も少しずつ心が通じ合うように努力し、慰めあって「頑張ろう」を合言葉にして励ましあったものでした。

5月の連休を前に仮設住宅が建設され、数世帯の人々が狭い場所での生活が始まりました。日々生活する中で、入居者皆が行政の有難さを認識するようになりました。現在ではお互いに食べ物を交換したり、周囲の清掃を共同で行い、皆の笑顔がかなり戻ったように思います。時折、町からの励ましの言葉や差し入れをいただき皆さん喜んでいきます。

仮設住宅に入居している者の今後の再建方法については、家を修理して戻る者、新天地を求めて地元を離れる者と半々です。私の息子は仕事や子供の通学を考えて町外へと移転してしまいました。私たち夫婦は何とか住めるように家を直そうと、宅地の崩れた部分を先日から修復を行っています。

しかしながら何をすることも先立つものはお金です。修繕も最小限度に収め、細々と老後の生活を営んで行く積りです。周囲の人々も広大な土地があっても何の価値のない時代になったことを悔やみながら、今更どこへも行けないから「一日一日生き長らえて行きましようね」と言葉を交わしている近況です。

地震発生当時私は、地元区長をまかされており、この紙面をお借りしまして全国から寄せられた支援に対しまして御礼を申し上げて締めくくりたいと思います。

感謝の一年

穴水町大町 皆森照子

「お母さん、地震やよ。早よ逃げよー」
娘の悲鳴と共に地中から突き上げる大きな縦揺れに続きこれまで経験の無い大きな横揺れ。能登半島地震です。

ギシ、ギシ、ギシと家は大きくきしみ、ガチャン、ガチャンと家中の窓ガラスが割れる中、私は意外と落ち着いていました。調理中のガス栓を閉め、長靴をはいて娘と共に外に逃げ出しました。通りに出てわが家を振り向いて見た時、初めて恐怖感に襲われました。1階部分の柱は大きく傾き、梁は柱から外れ、長年家族を守ってくれた倒壊寸前のわが家の姿がそこにありました。震災前には「貴重品、防災グッズは一カ所に置いてもしもの時に持ち出そう」と決めていましたが、持ち出す余裕はありませんでした。大きな揺れがおさまり、家から逃げ出す時、私は長靴を履いて出ましたが、一緒に逃げ出した娘は裸足で飛び出して、散乱したガラスで足にケガをしてしまいました。余震が続く中、親戚や友人からの安否確認の電話が鳴り続いていましたが、どうすることもできませんでした。

あの地震から1年。感謝の1年間でした。

震災直後から国、県、地元穴水町からのご支援。全国各地からのボランティアの皆様から励ましを受けました。

平成19年5月1日から大町仮設住宅への入居が始まりました。大町仮設住宅では、石川県で初の試みである45世帯の住民の中から、生活援助員2人が県から依頼されました。私もその生活援助員の一人です。1軒1軒、身体の調子などを聞いてまわったり、役場への必要手続きの案内やボランティアの方がおいでることを連絡したりするなどしましたが、仮設住宅内での生活援助員は同じ被災者であることから十分に対応できず、困惑することも数多くありました。余り毎日訪問しても嫌がられるのではないかと思います、6月から毎月1日に談話室に足を運んでもらい、体重と血圧の測定で自分の体をチェックしてもらいました。その後、お茶会を開き、それぞれの生活再建などの話をします。お顔を見せて頂けない方へは後で支援の案内や支援物資をお届けする時にお顔を拝見し、一人暮らしの世帯は夜、電気がついているかどうかで安否の確認をしていました。仮設入居時から町のボランティアグループ325の5人の方々が当初1週間に3回、住民への励ましや

声掛け、談話室で話し相手になっていただき、心配事などの相談もさせて頂きました。とても心強く、今では仮設の住民にとってかけがえのない存在となっています。

これまでの仮設住宅での生活を通して感じたことは、それぞれのお年寄りたちが持っている潜在能力を発揮するチャンスと場所があれば、高齢者の皆さんは生き生きと過ごせるという事です。高齢化率が高い奥能登でも、元気なお年寄りが多く住むということは、復興にもつながるものと思います。

仮設住宅住民、グループ325、行政間で毎月1回、仮設住宅の生活上の問題点、復興について情報交換を行っています。行政の各課の間で情報の共有化がされていないことにいつも不満を感じますが、これまでの国、県、穴水町からの大きなご支援には大変感謝しています。特に穴水町の職員の皆様には同じ被災者の立場ながら、復旧復興に向けて寝食を忘れて取り組んで頂きました。被災者の間で格差が感じられていた国の被災者生活再建支援法の改正で、自宅の再建にも希望が出てきました。

私は、退職後はゆったりと過ごしたいと思っていましたが、能登半島地震が私に「これからの人生でまだまだやる事がありますよ、頑張りなさい」と言っているように思われ、仮設住宅で出会った気の合う主婦3人で、商店街の空き店舗を利用して地元のお年寄りの方たちが気軽に立ち寄れる定食屋「ホットちゃん」の営業を始めました。穴水高校の生徒たちが考案した「もずくうどん」を受け継ぎ、地元の安全な食材をふんだんに使った季節の料理を提供しようと思っています。

復興への力となるのは、自分が住んでいる地域にどれだけ関わっているか、どれだけ愛情を持って、住民同士の絆を持って、生活しているかということです。被災して初めて、地域の絆、歴史、伝統文化を子どもたちに伝えていくことが、いかに大切なことか思い知らされました。伝統文化は一度途切れると、再び伝える事が難しい。映画「との花嫁」を見て痛感しました。

能登半島地震を体験して、今は「感謝」と「前向きに1歩ずつ前進」していく気持ちでいっぱいです。小さな力ですが、町の復興、生活の再建に向け、仮設住宅住民が力を合わせて頑張ることをお誓いします。

地震が教えてくれたこと

七尾市立小丸山小学校4年 南 優花

2007年3月25日。この日は私にとって一生忘れられない日になった。

日曜の朝、この日がピアノの発表会だった私は、じゅんぴもととのい母といっしょに家を出ようとした。その時だった。とつぜん、「ガタッグラグラグラグラ。」とはげしくゆれて、私はすぐこたつにもぐりこんだ。

ゆれがおさまってから、こたつから出てみたら、物がわれてガラスのはへんがとびちっていた。しかも立っただけで床がぐらぐらゆれて、歩くのもやっとだった。

「なにが起きたのか、どんなことになってるんだろう。」うまれてはじめての恐ろしさだった。液状化現象のため家の基礎が飛び、風がふくだけでゆれるようになってしまったため、この日から私は自分の家にすむことができなくなってしまった。

次の日から母の市役所通いが始まり、あっというまに新学期。アパートにひっ越して、私は4年生になった。

母がそだった家、私にとっても小さいころからの思い出がつまった家は、けっきょくこわすことになり、部屋のせいを手つだった私は大

切な物を捨てるのが悲しくて、泣きたくなりました。物だけじゃなく、おじいちゃんやおばあちゃんとのたくさんの時間がつまった家でした。

でも、悲しいことだけではありませんでした。不安でたまらない時に近所の人や母の友達がはげましてくれて、とても心強かったです。七尾は、門前や輪島ほどひどいひ害ではなかったけれど、周りの人たちの優しさや助けがなければ、ここまでこれなかったと思う。

あれだけ大きな地震だったのに、ケガもなく命があって本当によかった。

地震や災害時の訓練はふ段していても、本当に自分がひさいするとは思っていなかった私は、今回の地震できちょうな体験ができたんだと思う。今度何かが起きたらこのことを教訓にしたらいし、自分がしてもらったような親切や優しさを、人に対してできる自分になりたいと思う。

もうすぐ地震から1年になる。

今の私は、何もなかったかのようにくらせているけれど、あの日のことは決して忘れないでいようと思います。

(能登半島地震復興作文コンクール

小学校の部 最優秀賞作品)

地震をふり返って

輪島市立門前中学校2年 松原 萌

3月25日(日)、能登半島地震がありました。その時私は部屋でテレビを見ていました。すると急に大きな揺れがありました。それは立ってられないほどの揺れで、すぐに電気は消え、目の前のテレビや食器等はその揺れでほとんど床に落ちました。みるみるうちに目の前が別世界のようにになりました。私は、その揺れがおさまってから少しの間も今の状況を判断することができませんでした。家の一階に下りると、家には亀裂が入り、床は一面食器などの破片が散らばり、足の踏み場がないほどでした。

外に出ると近所のお寺がつぶれていました。また、周辺の家は傾いてかわらが落ちている家ばかりでした。そして、なによりそれを見ている人は皆この状況にすごく動揺していました。私も、その人々や状況を見て、急に不安など様々な感情が込み上げ、とてもこわくなってきたことを覚えています。度々起こる余震やそれにより少しずつ音を立てて壊れていく家々を見ていると、地震のおそろしさが迫ってくるようでした。しかし、そのような時も私のそばには家族や近隣の人がいてくれました。私は、その時普段自分を支えてくれている人達の存在の大きさを感じました。その晩、私は家族と一緒に児童館へ避難しました。そこには親戚の人もいて、食べ物を分け合い、翌朝からは家の片付けをはじめました。その際私は改めて人と人とが手を取り合うことの大切さを学んだ気がします。

今私の近所にあった家は十数件なくなりました。その家々が壊されていく様子を見ている、この町、そしてこの町の人々が受けた傷の大きさを感じます。しかし、その中でも今ではほとんどの人々が以前と変わらぬように仕事をしたり、生活を送ることができています。これは、日本全国からの多大な支援のお陰だと心から思います。それは、地震後すぐに多くの方がボランティアに訪れてくれたことや、たくさんの励ましのメッセージをいただいたことから、ひしひしと伝わってきました。また、修学旅行での復興イベントの際に出会った埼玉県在住の女性の方からは、地震後約一年経とうとしている今でも温かいご支援のお手紙をいただきます。私は、そのメッセージを読んで何度も何度も勇気づけられました。そして私達のために全国から駆けつけ、力を貸して下さったボランティアの方やご支援をして下さった多くの方に心から感謝しています。

今、そしてこれからの私達にはまだ多くの問題があると思います。しかし、その中でもこのように私達に手をさしのべてくれた人たちのことを決して忘れず、前に進んでいかなければと思っています。そして、いつか私も支えてくれた人に恩返しができると思います。地震は私達に大きな傷を与えましたが同時に、人の温かさを教えてくれた気がします。

(能登半島地震復興作文コンクール

中学校の部 最優秀賞作品)

能登半島地震

和倉温泉旅館協同組合女将の会 会長（大観荘）

大井 マ璃幸

1. 忘れ得ぬ日々

2007年3月25日（日）穏やかに晴れた朝。昨晩からお泊りのお客様の中には、春休みに入ったばかりのお子様が勢いいらっしゃいました。「4月になったらお兄ちゃんと一緒の小学校へ行くよ！」と明るい笑顔で車の中から手を振ってくれる男の子もおり、玄関前ではにこやかにお帰り頂くお客様の声々が溢れておりました。「有難う御座いました、又お越し下さいませ」と答える私。いつもの変わらぬ朝の姿がそこにはありました。

只一つ、未明から異常と思われる程騒いでいた鳥の鳴き声が止み、当たり前にいた雀も全く見掛けなく、「何だか変!？」と思いつつ、お客様のチェックアウト時刻のピークを終えた9時42分のこと。今迄吹いていた風が止まったと感じた瞬間、ゴー!と地の底からの音。同時に地面から突き上げる感覚。その後地面は右に左にと揺れ始めました。これが地震だと気付いた時、「今、私のすべき事は?」。その事が頭を過ぎりました。しかし車の中へ荷物を入れようとしたまま茫然と立っているお客様を車と車の間に誘導するのがやっとでした。道路を挟んだ向こう側にある大きな石灯籠は倒れ、当館の足湯の大屋根は左右へと大きく揺れていました。私はただ無事を祈るだけでした。

永遠に続くかと思った揺れが収まった途端、お客様は「自宅が心配だから行ける所まで行きます」とおっしゃり、車を次々と発車されて行きました。

館内に戻り、まずエレベーターの中に人が乗っていないか確認し、各従業員には火の始末を指示し、お客様を安全に誘導するために館内放送で地震が発生した旨と階段利用のお願い。またロビーにお集まり頂くように呼び掛けました。幸いお客様は全員怪我一つ無く落ち着いておられました。

2. 自分たちの力で

旅館の仕事はサービスでお客様を持て成す事です。根幹を成すものは御宿泊頂いたお客様一人一人の「命と財産」をお預かりするという重責です。従ってお客様がお帰りになる迄、一時も気を抜けません。

さて今回の『震度6強』という天災においては台風等と違い何の前触れも無く突然に襲ってくる為、全員がパニック状態でした。

道路の被害状況や交通機関の状態等、和倉温泉内の事ですら分からない状態の中、電話回線は不通。テレビでは上空からの映像や地震のコメントばかりで欲しいと思う情報は全く手に入りませんでした。

その中で「自分達の力で出来ることはやろう!」と従業員が一丸となり、自転車で近くのバスターミナルへ行って道路情報とバス運行状況を聞いたり、また車でタクシー会社やJRの駅に行き情報を収集したりと奔走致しました。被災当日の15時頃にはお客様は全員無事にお帰りになり、ホッと安堵しました。

和倉地区内のライフラインは全て無事でしたが、道路の陥没とそれに伴う温泉引湯管の破損、墓地においては多数の墓石が崩れ落ちていました。一見して倒壊した旅館は見受けられなかったのですが、内部は壁には無数の亀裂、ガラス窓は割れ、水道管の破裂で水浸し等々、自分の所だけではなく和倉全ての旅館は惨憺たる状況でした。

「明日からどうやって生きていけば…」と先の見えない不安で、悲しいのを通り越し、茫然自失の状態でした。

和倉——能登の地は、町内や班組織を通して近所との絆が強い所です。お互いに隣近所の家族構成は分かっており、どこのお宅に高齢の方がいて、その方の身体の具合まで知っています。又旅館には組合組織があり、そこから入る情報を地域の各組織に知らせたりして、共に助け合い支え合いという形が自然と発生していました。

3. 公助

私達にとって建物の被害以上に辛かったのは、風評被害による続出するキャンセルでした。

和倉温泉では一丸となり「G.W.迄には営業再開!」を目指し、皆死に物狂いで建物の修復や集客営業にと頑張り、県でも能登の大動脈である能登有料道路の復旧にいち早く乗り出してくれました。その為道路は4月27日に全線開通の運びとなり、又県知事自らが先頭に立ち、「元気宣言、能登」のキャンペーンを日本各地で展開して頂きました。

また地震が起こった際には全国の皆様から頂いた多くの御支援、そして励ましの御言を心の支えとし、「前進あるのみ」と固く心に誓い、今日現在、そしてこれからも頑張っていきたいと思えます。

①自力…自分達の出来ることは自分たちです。

②共助…その上でお互い出来ることをして、共に助け合う。

③公助…次に一刻も早い国・県の支援。

この三点が素早く一体となると、被害も最小限に食い止められる事が分かりました。そしてそれ以上に有事の時こそ人々との絆が必要だと心から思っております。

震災と輪島塗業界

輪島漆器商工業協同組合理事長 岡垣昌典

「地震は忘れた頃にやってくる」、この言葉の意味を本当にかみ締めたのは、私だけではないでしょう。この日私達が体験したことは、何時でもこの国に起こりうることなのだと、再認識させられた事実でありました。

3月25日午前、私は自宅で、日曜日ということもありゆっくりと時間を過ごしておりました。もし何もなければ、きっとこの日の情景も記憶には残っていなかったでしょう。遅い朝食の後、洗面台の前で歯を磨いていた時、突然ふわふわした感覚に襲われました。それが地震とわかったのは、次の瞬間、急に横揺れが起きたときでした。いま振り返ってみれば、地震が起きる直前に轟音が響いたとも考えられますが、何も警戒心を抱いていない私は気がつきませんでした。家中を駆け巡る激しい揺れに、妻は何も言葉が出ず、辺りを見回し震えておりました。とにかく二人でテーブルの下に隠れました。まず庭の方から聞こえる大きな倒壊音、続いて二階の方から、そして私たちのすぐ隣の食器棚からも激しい音が響きました。これらの倒壊音が耳に入ってくる度に、私は不安に襲われ、これが現実であってほしくないと祈るばかりでした。

非常に長い時間、揺れが続いたと思います。揺れが収まり、恐る恐るテーブルの下から這い上がり、少しずつ周りの様子を確かめていきました。近所に住む父母や知り合いなど、とにかく人の顔ばかりが思い出され、テレビで震源地を知ったとき、この不安は最も大きくなりました。当然のように通じていた電話も使えず、私は慌てて外へ出て、父母の元へと急ぎました。幸いなことに父母は無事で、十数年前の酒田沖地震の際に食器棚の上に取り付けた鎖が、辛うじて倒落から守っておりました。この鎖がなかったらと考えると、背筋に寒気が走りました。備えあればを、正に証明された現実でした。

固定していない電化製品等はそのほとんどが倒れ、休む場所の確保の跡片付けに飲まず食わずで夢中で、落ち着いた頃は、もう夜になっており人間も頑張れるものだと感心しました。翌日からきつい筋肉痛に悩まされましたが。

能登半島地震の発生は、私共輪島漆器業界に於きましても、店舗、生産設備作業場、塗師蔵等の建物の全半壊130件をはじめ、そのほとんどが、商品、設備、材料を含め一部損壊以上の甚大な被害を受けてしまいました。視認出来た被害状況に、今後の塗師屋を含めた業界の事業継続再開が一体何時になるのか、見当すらつかない状況にまで追い込まれた絶望感がありました。

しかしながら、国、県の助言、御指導の基、早期の4月20日に激甚災害の指定を受け、中小企業関連の特例措置が適用されました。これによりまして、今後の復興に向けての各種支援制度を設けられ、今後の早期業界復興の足がかりを見出すことが可能になり、輪島漆器震災復興計画も策定することが出来ました。また多くの輪島漆器のご愛用者の皆様から、お見舞いや、応援注文、ご支援がありまして、業界全体が一体となり対応させていただきました。このことは、大いに職人方の励みとなり勇気づけられ、先人から受け継がれている歴史の重さに、改めて感謝奉る次第です。

現在は、この輪島漆器震災復興計画に基づきまして、業界として、事業用建物、付帯設備の復旧、復興にあたっており、今後は、この危機をバネに新規の商品開発及び、後継者育成等の事業にも拡大し、取り組む所存であります。機会良く現在、輪島塗の世界無形遺産登録運動に対する機運も高まっており、この復興計画が、これからの輪島漆器産地の確固たる漆の里としての地位を確立させていくものと考えており、皆様方のさらなるご指導ご鞭撻を重ねてお願い申し上げます。

真の復興に向けて

合名会社中島酒造店代表 中島浩司

平成19年3月25日（日）当日は3月には珍しく晴れ上がった暖かい日だった。当時私は会合で市内のホテル4階に居りました。突然ゴーツと言う地鳴りと伴にドンと下から突き上げる強烈なショックを感じ、一瞬何が起こったか判断出来ませんでした。その後の強烈な揺れは鉄筋4階建てのホテルが倒壊するのではと思った程でした。会社に電話したところ電話から聞こえたのは妻の絶叫のみ。急いで帰宅したが、途中神社の大鳥居や寺の鐘楼が倒壊しているのを見て相当酷いことになっているとは感じましたが、不思議と酒蔵建物には思いが及びませんでした。酒のタンクはどうなっているだろうか？かなりこぼれただろうな、などと考えながら帰り着くとけが人も無く、店は大丈夫そうだったので安堵しながら奥へ足を進めて唾然としました。酒どころでは無い、蔵自体が壊れて中へは入れない状態でした。土埃が舞っている。危険を顧みず何とか掻き分け入って見るとタンクが台から落ち、傾き、こぼれ流れ出した酒で床中びしょびしょの状況でした。

頭が白くなり、ただ薄笑いをしている自分に気づきました。そう、とんでもない事に遭遇した時、人は笑うことしか出来ないのです。

直ちに残った酒の救済を考え、酒造組合に相談したところ、自社の蔵は被害が少なかった蔵から2社が快く申し出て頂き、内1社が早速タンクローリーで駆けつけてくれました。そのまま、とにかくピストン輸送して被災した酒を移動し、何とか7割の酒を助ける事が出来ました。現在も瓶詰め作業をその蔵で行わせて頂いておりますので製品化作業は支障なく進んでおります。普段はライバルとして競争していながら、いったん事あればありがたく頼もしい仲間です。

さて、その後がもっと大変です。酒屋の仕事歴史と伝統を重んずる業界、ご先祖様から引き継いだ蔵が在ったから出来る仕事でした。新たに起こせる産業ではありません。又、地場産業の象徴としても街に無くてはならないものとも自負しております。

種々多方面からの応援を賜りまして、皆様には心より感謝致しております。市、内外からの応援と励ましと、行政の「出来るだけ支援します」の言葉にも背中を押され、私どもは熟慮する間も無くまずは復旧に向けてただただひた走ってきました。

おかげさまで酒造業が、残さなければ為らない地場産業として復興支援業種に指定され、私は輪島市酒造業復興委員会の委員長として、酒屋全体の復旧・復興の為、全力で務めさせて頂いております。

現在、各酒造会社は復興事業対象としての責任感と、楽しい街づくりに必要な市民に密着した観光産業としての自負もあり、全員熱に浮かされたように一心不乱に復旧に取り組んでいます。

「頑張れ！頑張れ！！」。とてもありがたい言葉です。とっても嬉しいです。反面、或る意味つらい点もあります。心からの応援に対して妙な責任感が湧き、頑張れないとも言えず、無理を承知で頑張ってしまう自分達が居る。実は廃業が最も有力な選択肢でした。

突き進んだ今、ふと我に返ると今後どうなるのか？負債償還期限の10年後には当社を始め各酒蔵は生き残っているだろうか？何より返済してゆけるのだろうか？正直、不安があることも事実です。

誤解しないで下さい。皆様のお心には重々感謝致しております。今回の地震被害には迅速に対応していただき、前例の無い地場産業支援策もどんどん起ち上げて頂きました。

しかしながら、復旧・復興に向けての負担は想像以上に大きなものであったことも事実であります。そんな大きなマイナス要素と不安を抱えながらもがりなりに表面上は、やっと復旧の目途は起ちました。

ただ、本当の復興はこれからです。様々な被災された方々がおいでです。お互い手を取り合いながら、前進できますよう市民の皆様・行政には今後より一層のご支援を賜ります様お願い致します。

全てが初めての経験

総持寺通り商店街復興委員会 五十嵐 義 憲

珠洲沖、秋田沖地震による揺れは知っていましたが、最大震度6強。乾いた「ドン」という音の後、上下左右前後の強いゆれは初めてです。時間的には短かったが、地震だと気がつくまで何だこれとは座り込んでしまい、周りの家、電柱が激しく揺れているのを目に、初めて地震だと認識しました。それからは、「興禅寺がつぶれた」との叫び声で、アッ中に人がいるはずと強い恐怖を覚えました。3月25日は「能登・雪割草まつり2007」2日目で、町内の女性達8人が準備のため作業をしていました。私の御加護でしょうか、幸いにしてかすり傷程度で、皆さん自力で脱出していました。しかし商店街は、瓦が、ガラスが、板きれが散乱し、一変しました。雪割草まつりは中止となり、スタッフに家に帰るように、かなり強い口調で告げた記憶が残っています。テントも机も雪割草のポットも散乱したままでした。

自宅は家具が倒れ込み、土足で上がる状態では何をしたら良いのか分からぬまま、「門前児童会館」に避難し、町内の人たちと眠れぬ一夜を過ごした。

私の店は、棚が倒れ、商品はほとんど棚から落ちましたが、幸いにも鉄筋コンクリートで店舗には被害がありませんでした。余震が続く中、散乱した商品は、取りあえず段ボールに入れたままで一日も休まず店を開け続けました。

4月、能登半島地震が激甚災害に指定、更に支援基金の創設、総持寺通り協同組合も、市、商工会の三者で復興委員会を5月16日に設立し、復興への準備に入りました。

商店街の会長が、復興委員会の長を務めることになりました。私自身の店舗には被害がありませんでしたので、被害の少ない俺がやる、と覚悟を決めた次第です。

A4判1枚の紙に復興計画のメニューが書かれた物が提示されましたが、なかなか理解できません。県、市の担当者と何度もメール、電話のやり取りで相談しました。「罹災証明」という言葉を初めて聞きましたが、これが被害を証明する書類でした。

支援内容も、個店への「事業用施設設備復旧費助成」では修理、再建の支援金が支払われました。日本で初めての災害における助成だそう

で、被災した商店には大変励みになりました。また門前町には「総持寺周辺地区まちづくり協議会」が平成13年度から寺町風情をテーマに建物修景が実施されており、建物の再建修復を後押し、早めたと思います。

20年5月現在、商店街会員数39店、全半壊28店舗、一部損壊9店舗でしたが、建設中を含め未改修が残り4店舗となるまで再建できております。更に5月21日、全壊した「興禅寺」では来週の再建を目指して地鎮祭が行われました。

震災では、大勢のボランティアの方々に支援を頂きました。空き地に、2階の屋根ぐらいの高さまで積み上げられた被災ゴミが、一日できれいに無くなりました。感謝しています。震災当日、3時頃から救急車、消防車が続々入り、夕方には医療関係者も入られたようです。翌日は、空には数多くのヘリコプターが上空を旋回、報道関係者、更に警察関係、自衛隊と救助に来ていただきました。総持寺通りは救助、報道関係者の車両が多くなり、総持寺からの一方通行の規制が行われ、田舎町に時ならぬ交通ラッシュになるほどでした。

幸いにして門前町では亡くなった方がいません、しかし家屋の下敷きになった方は数多くあったようです。ただ死者が無かったことが後に復興を早め、明るさがあったように思います。上下水道は使用不能に、でも電気は停電せず、灯りと電子レンジが使える、温かい食べ物、飲み物が取れたのは助かりました。震災直後は炊き出しのご飯が重宝しました。

沢山の被災者の皆さんから聞いた話を整理しながら、経験を伝えていくことが、私たちの大切な使命だと考えます。ライフラインはほぼ修復されましたが、一部損壊の私の家でも、壁の角はかけたままです。

町の中はまだまだホコリっぽく、再興の土音が何処彼処から聞こえています。町内個々の家庭ではまだ修復は進んでいません。これからです。是非、門前へお越しく下さい、声をかけていただければ経験した事をお話しいたします。日本は地震国、何処でも地震が起こりうるのですから。

感謝 合掌